

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



和一尚休

154
109

始





一
休
和
尚

大正
11. 11. 16
肉交

版堂雲棗



150067

はしがき

『社會講談』といふものが一つの新しい流行になりかけてゐるのは、確かに面白い時勢の反映である。私の頭も其の時勢に突ツつかれ、其の流行に押しやられて、少しばかり『社會講談』を書いて見た。

第一に書いたのが『鑄掛松』で、それが初めて『改造』に載つた時、大ぶん世間の評判もよかつたし、自分も聊か得意であつた。それから二三の人がそれを實演して見してくれたが、扱て實演となると、どうもあのまゝでは遣りにくいといふ。それは其の筈で、私は只だ読み物として書いたに過ぎない。だから今後、私の書いた物を實演してやらうといふ人達は、銘々の口調なり、癖なり、好みなりに従ひ、又その折々の時問の都合、聴衆の種類なりに従つて、如何様にも變改増減を施して戴きたい。只だ私

の望む所は、大體の仕組と、根本の趣意と、肝腎な言葉とを、間違ひなく取り入れて戴きたい。

第二に書いたのは『一休和尚』で、私自身としては『鑄掛松』よりも上出来だと思つてゐる。然し其の中、前の半分は、從來の講談にある事柄を其まゝ借用して、只それを成るべく短かい言葉の中に、面白く引き締めたと云ふに過ぎない。そこで私の創作したのは後の半分で、それには他の講談の影も形もない。殊に自來也を引合に出して來たのは、私の頗る得意とする所である。此の私の得意とする部分が、神戸の英字新聞『ジャパン・クロニクル』の週刊に譯載されたのは、大いに愉快だつた。

第三に書いたのは『大鹽騒動』で、これは失敗の作だと評されてゐる。私も實はそう思つてゐる。最初の所に、大鹽の撤文を朗讀させたのが殊に拙かつた。あの撤文は漢文と候文とを交ぜた分りにくい文章で、あれを朗讀させたのでは、講談にならない

ばかりでなく、只の讀み物としても甚だ面白くない。只だ私の意匠は大鹽の一件を少しも内部から書かずに、總て外部から（即ち周圍に影響した所から）描き出さうとした所に在る。殊に最後の易者白髯は、全く私の創作で、あそこだけはチョット面白いと自惚れてゐる。

第四の『桃太郎』は、帝國主義の侵略思想として有名なアノ話を、労働運動に持つて來て、『金持鬼征伐』にした所を、買つて戴きたいといふまでの事。

第五の『バリ・コンミュン』と、第六の『十一月七日』とは、全く講談の體裁を爲してゐない。あれは只、實演家の爲に材料を供給したに過ぎない。然し只の讀み物としては、（少し考へて、氣をつけて讀んで戴きさへすれば）、可なり面白いものだと思つてゐる。

今後、私がまだこんな物を書くかどうかは分らないが、鬼にかく此の『社會講談』といふ新流行に對して、私も其の一部分の役を勤めたといふ事が、私として少なからぬ愉快であり、満足であります。

大正十一年九月

堺 利 彦

一休和尚 目次

鑄 掛 松

前口上	一
一、蛙と人間との違ひ	一
二、俺も不仕合せだが親爺も不仕合せ	五
三、俺ア之から獨りで寂しいやい	七
四、欲しいのは只だ金だ	一〇
五、どうあつても一族上げしてえ	一三
六、松坂城の富の由來	一五
七、世の中のカラクリの底の底	二〇
八、千兩箱が山ほど積んである	二四
九、覺えずブル〜と震へあがつた	二八
	三三

十、身代りを半分呉れてやつた……………三七
十一、サア之からだぞ、之からだぞ……………四〇

一休和尙

一、蟻川新左衛門との問答……………四五
二、門松は冥土の旅の一里塚……………五三
三、金銀財寶は地獄まで持つて行かれん……………六二
四、他人の汗あぶくを絞る道具……………六九
五、自來也と世の末……………七四

大鹽騷動

一、人間といふ奴は馬鹿なもの……………八一
二、天より下され候書付……………八三
三、町人公方と小竹先生……………八九

四、大砲、火砲、砲録玉の一日……………一〇九
五、易者にも分らん事……………一九

桃太郎 (金持鬼を征伐した話)

パリコンミュン……………一四四

一、二ヶ月間の労働者の天下……………一四四
二、普佛戦争、パリ政府の降伏……………一四五
三、國民兵の大活躍……………一四七
四、三月十八日の一揆……………一五一
五、パリ・コンミュンの成立……………一五六
六、第一戦の大敗北……………一六一
七、多数派と少数派……………一六四
八、内政の各方面……………一六八

- 九、煙硝と火繩、柱塔の引什し……………一七七
- 一〇、バリケードの戦ひ……………一八〇
- 一一、赤旗と三色旗……………一八五
- 一二、「血みどろ週間」の最後……………一八八

十一月七日……………一九二

鑄 掛 松

前 口 上

堺 利 彦

え、皆さん！。イヤ『諸君』で行かう。

そこで諸君！。日本は實に美しい國です。櫻の國です、菊の國です、富士山の國です。こんな美しい國に生れ合せた我々日本國民は實に幸福です。併し諸君、忘れてはイケナイ。富士山は其の昔し火山であつた。今はあゝしておとなしく静まり返つてゐるが、いつ又恐ろしい火焰を吹きだすまゝのものでもない。淺間や阿蘇は今でも黒煙を擧げてゐる。だから日本は火山の國です。従つて又地震の國です。富士山が日本一の名物である以上、どうも之は仕方がない。菊と櫻は美しいが、地震

と火山は恐ろしい。日本は實に美しい國でもあるが、又實に恐ろしい國でもある。困つたものだ。

所が諸君、もひとつそれに似た様な事がある。日本は昔から美人の國だ。女ならでは夜の明けなかつた國だけあつて、小野の小町や衣通り姫、靜御前や常盤御前、勾當の内侍は新田義貞を迷はせ鹽谷高貞の奥方は高の師直を參らせた、大閤の思ひもの淀君は誰でも知る。傾城では高尾、小紫、今紫、明治の御代と相成つては西京の加代千代を初めとして、近くは新橋のボン太があつた。猶又最近に於きましては、萬龍と申す優物があつた。更に現在幅利の藝妓諸君、女優諸君、女中諸君、女給諸君の類は申すに及ばず、華族富豪大家名家の夫人令嬢乃至は未亡人の方々に至るまで、數へ立てれば際限がない。如何にも日本は美人の國だ。二千五百年の歴史を通じて、美人系統が連綿として續いてゐる、此の點に於いても日本は實に世界無比である。宇内に冠絶し、萬邦に卓越した特殊國である。特殊部落が新平民の村を意味し、特殊學校が貧民學校を意味する様な、そんな言葉使ひは此ごろサツバリはやらない。先ごろ米國ワシントンに開かれた國際労働會議の其時以來、日本は更

に光榮ある特殊國になつてゐる。八時間労働を九時間、十時間、十一時間に負けて貰つた所に値打がある。労働なんといふ者は時間の長いだけ好みに極つてゐる。分り切つた事である。それを分らんなどと申す労働者は、西洋にばかりあつて日本には一人もない。そこが即ち亦た特殊國の特殊國たる所以である。

イヤ之は飛んだ横道に話がそれて申譯がない。扱て日本は美人國である。併し諸君。忘れてはイケナイ。日本は美人國であると同時に泥棒國である。「濱の眞砂は盡くるとも」といふ最後の悲鳴を擧げて釜いりになつた石川五衛門君は、實に古今の大眞理を喝破したものである。鼠小僧、稻葉小僧などいふ大先輩から、近來のピストル強盜清水定吉、スリの親分仕立屋銀次などに至るまで、世に泥棒の種は決して盡きない。日本は實に美人國でもあるが、泥棒國でもある。美しい國でもあるが、恐ろしい國でもある。困つたものだ。

併し諸君、諦らめて下さい。之も特殊國の特殊國たる所以だと諦らめて下さい。私なんぞはモウ

疾いづくの昔むかしから諦あきらめられてゐる、尤も、私には別に取られる程の財産ざいさんが無ないんだから、諦あきらめが付きやすいのかも知れない。諸君しよくんも諦あきらめが付きにくかつたら早く無財産むざいさんになる事だ。イヤもう大抵たいていそこまで漕こぎつけてお居ゐで、せう。失敬しよくな申分まうぶんだが、諸君しよくんの中に餘あまり金かねのありさうなお顔かほが見えない。何しろ川向かわむかふの火事くわじを見るのは面白いものです。自分の家いへの焼やける氣遣きぢひさへ無なければ、火事くわじほど景氣けいきの好こいものはない。露西亞ロシヤや獨逸ドイツの革命騒動かくめいさうどうを電報でんぱうで見ると同じ事ことだ。ツアールがやられた、ヤレお痛いたはしい。カイゼルがやられた、ヤレお氣きの毒どくな。などと思おもひやりのありさうな事を云いふ者ものもあるか知らんが、諸君しよくんの其そののお顔かほつきは、失敬しよくながら餘あまり「お痛いたはしい」の「お氣きの毒どく」のといふ、そんな殊勝しよしょうな聲こゑの出いさうな柄がらではない。

オヤ又大またふん話わが横道よこみちにそれかけたが、要しよするに諸君しよくん、どうせ我々われわれはお互ひたひたに貧乏人びんぼうじんだ。今日は一つ「鑄掛松ちうかけまつ」と云いふ泥棒どろぼうの話わでもして、川向かわむかふの火事見物くわじけんぶつと洒落しやれようぢやありませんか。

*

*

*

*

一 蛙と人間との違ひ

蛙かへるの子は蛙かへるになる。將軍しやうぐんの子は將軍しやうぐんになる。大名だいめいの子は大名だいめいになる。サムライの子はサムライになる。町人ちやうじんの子は町人ちやうじんになる。百姓ひやくしやうの子は百姓ひやくしやうになる。大工だいくの子は大工だいくになる。肴屋さかやの子は肴屋さかやになる。鑄掛屋ちうかけやの子は鑄掛屋ちうかけやになる。そういふ世よの中の仕組しぐみになつてゐた徳川とくがわ様の御時代ごじだい、今いまからザツト八十年はちじゅうねんばかり前の天保何年てんぽうなんねん、お江戸えどは神田新銀町かんだしんぎんちやうの一丁目いちぢやうめに、鑄掛屋ちうかけやの松五郎まつごろうといふ若い者ものが住すんでゐた。松五郎まつごろうの親爺おやしも勿なし鑄掛屋ちうかけやだつた。若し松五郎まつごろうが正直しやうじきに其そのの稼業かせぎを續つけて、やがて女房むすめを持つて子を産うんだら、其そのの子こも矢張り鑄掛屋ちうかけやになる筈はずだつた。所ところが松五郎まつごろうが不圖ふとヒョンヒョンな氣きを起おこして泥棒どろぼうになつた。そこが人間にんげんと蛙かへるとの違ちがふ所ところだなど、私は今いまこれを書かきながら初めて悟さとつた。

尤も、松五郎まつごろうが一生しやうせい涯鑄掛屋ちうかけやをややり、其そのの子こも一生しやうせい涯鑄掛屋ちうかけやをややつたとしても、其そのの中うちには徳川とくがわ幕府ばくふが政權せいけんを朝廷てうていに返上へんじやうして明治めいしといふ新あらたらしい世よの中うちになり、百姓ひやくしやうや町人ちやうじんが金持かねもちとなり、紳士しんしと

なり、實業家となり、代議士となり、資本家となり、富豪となり、士族は兩刀を棄て、商賣をやつて見たが、大抵は皆な失敗して公債證書を無くなし、結局、小役人や巡査や小學教員や労働者になつて了つたのだから、其の士族と百姓町人との間に挟まつてゐた鑄掛屋の松五郎の孫や曾孫が、必ずしも親譲りの鑄掛屋になつたらうとは限らない。在外、何かで儲けだしてエライ實業家にでもなつて居ないものでもなし、或は何かの拍子に小學問でもして官吏などになり、相當立身して居まいものでもない。併し又、どうせ貧乏人のウダツがあがらないで、どこかの工場の職工にでもなつて不平を起し、今ごろは労働組合でも拵へてストライキの何のと騒いで居る様な事かも知れない。けれども何しろ天保何年の當時はまだ、アメリカの黒船の來ない前で、葵の御紋の御威勢は天壤と共に窮まりなしと思はれてゐたのだから、鑄掛屋松五郎の血筋を引く者は、子々孫々に至るまで矢張り貧乏鑄掛屋で、一生を終る者だと思はれてゐた。僅か三十年かそこの後にあの御威勢の徳川様が脆くも仆れて、謂ゆる御維新の世の中が出來ようなどは、夢にも考へられない事だつた。そこで

で松五郎がついヒヨンな氣を起す様な事にもなつた。人間の子は蛙の子と違つて不料見を起すから困る。

二 俺も不合せだが親爺も不合せだ

儲、松五郎の親爺は松藏と云つた。松藏は至極ノンキな男で、確つかり者の女房に早く死なれて一時は大ぶん當惑したもの、貧乏暮しには口の少いが一番だ、結局この方が氣樂でいゝと、悴の松五郎と只つた二人で蛆をわかしながらノラクラと過してゐた。

『オイ松や』何だい、お父つさん』おめえ毎度濟まねえがなア……』お父つさん又お酒かい。およしよ』マアそんなに云ふなツて事よ。おめえは本當に孝行者だ。サア早く行つて買て來てくんないつもの通り三合だよ。可いかい。ソラおあしだ。』

こんな風で、松藏は少しでも稼ぎだめの錢が残れば直ぐに酒ばかり飲むのだつた。そして松五郎

はいつでも澁々ながらそれを買ひに行くのだつた。

『お父つさん、俺ア一生懸命はたらくから、お父つさんも餘んまりお酒なんか飲まない様にして二人でおあしを溜めようぢやねえか。エお父つさん。』松五郎は毎度こんな事を云つては親爺に意見をした。十八の浮かれざかりがこんな殊勝な事を云つてるのに、親爺は一向平氣なもので『馬鹿を云ふよな、酒なくて何んのおのれが鑄掛かなだ。ハツハツ、、、どうせ一生この通りだ。飲めなくなつたら死ぬまでよ。ケチ／＼するな、江戸兒ぢやねえか。俺ア眞黒になつて稼ぐ奴の氣が知れねえ』と、斯ういふ調子だ。松五郎は仕方がないから、只だ自分だけ食ふ物も食はない様にして獨りでセツセと稼いでゐた。

併し松五郎は折々考へた。本當に仕様のない親爺だ。どうしたらあんなにグウタラなんだらう。親爺があんなぢや俺だつて稼ぐ張合もありやしない、馬鹿々々しい。本當に仕様のない糞親爺だ。俺は忘れても親爺の眞似なんかしやしない。酒なんぞ一つたらしだつて飲むものか。

併し又松五郎は考へ直した。あゝお母アがゐたらならア。お母アのゐた時分は親爺もこんなぢや無かつたつけ。お母アが死んでくれて、俺も不仕合せだが親爺も不仕合せだ。考へて見りや親爺だつて可哀さうだ。マア仕方がない。俺がお母アと親爺と三人ぶん稼ぐんだ。そして親爺に死ぬまで飲ませてやらう。

松五郎は斯うして親爺のグウタラに憤慨しながら、それが又逆様に勵みになつて、脇目も振らず一心に働いた。そこには確つかり者の母親の遺傳といふ奴もあつたらう。そうしてそれが父親のグウタラに對する反動といふ奴になつて現はれて來たのもあつたらう。併し又一方には、其のお人好しの父親の血を受けて、自分が一つたらしも飲むまいと決心した其の酒を、親爺には死ぬまで飲ませて喜ばせてやらうといふ、柔しい氣心も出るのだつたつたらう。それで、松公は若いのに感心だ、稼ぎ者だ孝行者だと、近所界隈の評判だつた。取りわけ禿樂罐の大家さんは、無暗と松五郎に惚れこんでしまつて、外の若い者に意見する度んびに、お前達もチト松五郎を見習ひなさい、あれ

の爪の垢でも煎じて飲ませたいと、いつでも松五郎を引合に出すのが癖だった。その松五郎があとで大泥棒になつたのだから、嚙ぞ大家さんはビックリしたらう。

三 俺ア之から獨りて寂しいやい

或年の暮の事、雪の降りだした寒い夕方に、松藏が鯨を一疋さけて戻つて來た。「有りがてい。今日は之で一杯いたゞけらア。なア松、鯨のチリといふ奴ア天下の珍味だ」なんて云ひながら、例の三合を樂しんだ。松五郎は何んにも云はない。と云つて別段悪い顔もしない。茶漬をサブサブとかつこんだきりで、夜なべ仕事の鍋の底を冷たい土間でコンコンと叩いてゐた。

所が其の晩、夜中過になつて、親爺がウンウン唸りだした。「お父つさん、どうした？」「痛てい！痛てい！腹が痛てい！あゝ痛てい！マ、マ、松や、俺ア死にさうだ！」松五郎はコイツ大變だといふので「お父つさん、暫く我慢してゐてくんよ。俺アお醫者に走つて來るから」と、行き

なり雪の中を駆けだした。

やゝ暫くして松五郎が轉がりこむ様にして戻つて來た時には、親爺はもう死んでゐた。「お父つさん、お父つさん、今にお醫者が來るよ。……オヤ冷ていや。……お父つさん、おめえ死んだかい。

……ワアアツ！俺ア厭だ厭だ。……オイ、お父つさん、お父つさん、お父つさん。」泣き聲でいつまでもいつまでも呼んでゐるが、固より返事の出ようがない。醫者はとうとう來なかつた。

松五郎は薄暗い行燈の前で親爺の死骸を見守りながら、寒い事も忘れて考へこんだ。玄庵の畜生とうとう來やがらねえ。俺の内を貧乏だと思ひやがつて、馬鹿にしてらア。貧乏人だつて親は親だ。醫者にも見せねいで殺して濟むけい。お父つさん勘忍してくんなよ。こんな事と知つたら酒の一升も飲ませてやるんだつた。あゝあゝ俺アとうとう獨りボツチになつちやつた。オイお母ア、お父つさんも死んだよ。俺ア之から獨りて寂しいやい。

夜が明けると近處の人達も來てくれた。禿樂罐の大家さんも早速來た。松五郎は無暗と線香を親

爺の枕元に立てゝゐた。

「蚊いぶしぢやあるまいし、松さんこんなに線香を立てゝどうするんだい」と、隣りのおかみさんが仆れた線香を立て直したり、灰の落ちたのを片よせたりしてくれた。松五郎はどうする事も出来ないで、せめて線香でもノベツに立てるのが慰めだった。

「大家さん、マア聞いておくんなさい。ゆうべ俺が行つてあれほど頼んだのに、玄菴の畜生、とうとう来やがらねえ。小半時も表の戸を叩かせやがつて、ヤツトの事で起きたかと思や、ヤレ雪が降るの、寒いのと抜かしやがつて、雪の晩に病人が出来ねえと極つてやしめえし、人を馬鹿にするにも程があらア。ねえ大家さん、醫者なんて奴ア病人のお蔭で食つてゐるんぢやねえか。そりや俺の内は貧乏に極つてゐるさ。だけど大家さん、俺だつて樂代を拂はねえと云やしめいし、俺アいめいまして仕様がねえ。とうとう親爺に樂一服のませねえで殺しちやつた。大家さん俺ア本當に悔しい。」

「それで何かい松さん。玄菴さんはどうしてもおめえの内に見舞に来るのは厭だつていいのかい。」

「ナニ、そうでもねえ。まさかそうは云へないやな。だけど何のかのと勿體をつけて、ぐずつかくやつてる中に、又一つ外から迎へが来たアね。それが本石町の松坂屋さんだつたから堪らねえ。玄菴の畜生、二つ返事で突走つて行きやがつた。歸りにお前の内にも廻つてやるよなんかと抜かしやがつて、とうくそれつきりスツボかしさ。俺ア大家さん悔しくて仕様がねえ。」

「成程なア。松坂屋さんは名代の呉服屋だ。同じ松でも松さんの内とは比べ物にならねえ。マア仕方がねえ。松さん諦らめなせえ。鰻といふ奴は兎かくのだが、それも矢張り人の運だ。松さん仕方がねえ、諦らめなせえよ。」大家さんは斯う云つて松五郎を慰めた。そして弔ひの指圖などを親切にして、禿藥罐を光らせて歸つて行つた。

併し松五郎は明らめられなかつた。

四 欲しいのは只だ金だ

親爺の弔ひを濟ませて松五郎はいよく、獨りボツチになつた。そして間もなく寂しい正月を迎へた。併し松五郎は之でいよく、本當の獨り立の男になつた。年は取つて十九歳、貧乏鑄掛の見る影もない暮しではあるが、身の丈は五尺三寸ばかり、鐵のような堅実で、どこから見ても倔強な若者だ。註文どほりの苦味ばしつた顔が、親爺に死なれてから一層苦味ばしつて來た。恰好なり心持なり總てが急に大人らしくなつて來た。

やつと七草の過ぎた或日、松五郎は親爺の残した一張羅を引つけて大家さんの處に出かけた。

『イヨウ！ 見違へるほど立派な男になつた。ウ、ウ、ウ、成ほど親爺の着物か。イヤ好く似合ふ好く似合ふ。何んしろおめえも之からいよく一本立だ。容易な事つちやねえ。尤も、おめえの事だから心配は入らねえが、俺ア松さん、おめえの事なら何でも相談に乗るよ』と、禿藥罐は相變らず機嫌が好い。

『有りがたう御座います。實はあつしも御相談にあがつたんですが、大家さん、あつしやモウ鑄掛

屋はやめます。』松五郎は突然こんな事を云ひだした。

『ホウ、鑄掛屋をやめる！。折角習ひ覺えた手職をやめてどうしようていんだ。そりや松さん、考へもんだぜ。』あつしや大家さん、吳服屋になります。『ナニ、吳服屋！』あつしや大家さん、松坂屋ほどの店持にならなきや承知が出来ねえ。『ハ、ア成あるほど、おめえは親爺の死んだ時……』ええそうですよ。あつしや玄菴の畜生が松坂屋にばかり行きやがつて、あしツの内に来て呉れなかつたのが癪にさわつて堪らねえ。だけど考へて見ると、それも無理がねえんでさア。大家さんの仰しやつた通り、松坂屋と松藏の内とは同じ松でも比べ物にならねえ。だからあつしも吳服屋になつてウント金を溜める積りだ。大家さん一つ相談に乗つておくんない。『成あるほど、おめえの云ふなア尤もだ。俺にも其の心持や好くけせる。だけど松さん、矢つ張りおめえは若けい。商人は商人職人は職人だ。滅多に稼業の變へられるもんぢやねえ。殊に吳服屋なんていふものなア、小僧の時から年期を入れてサ、十年二十年の辛抱を積んでサ、それで御主人のお眼識に叶つて、ヤツトの事

で暖簾分でもして貰はうといふわけのもんだ。十九の歳まで鑄掛屋で通して来たおめえが、どうして今から呉服屋なんぞに成れるもんかい。そんな夢みたいな事を考へねいで、慣れた稼業を一心にやる事だ、のう松さん、おめえは堅人だ。好い若けいもんだ。一心不亂に稼ぎなせい。今に俺が素敵なおかみさんでも世話してやらうぢやねえか、のう松さん。サアまあズツトこつちに來て火鉢にでも當んなせい。今日は馬鹿に寒いや。」

斯う云はれて見ると松五郎も我が折れた。併し今の松五郎には寒いも暑いもない。素敵なおかみさんなんか欲しくない。欲しいのは只だ金だ。「ぢや大家さん、呉服屋は駄目ですかねえ。詰らねえ世の中だ。一生涯「鑄掛屋で御座アい！」か。馬鹿々々しいなア。」松五郎は不服な顔でスゴスゴと歸つて來た。何だか禿樂罐が憎らしい様な氣がした。

五 どうあつても一旗擧げてえ

「鑄掛屋で御座アい！」鑄掛屋で御座アい！」松五郎は又虫を殺して毎日々々一生懸命に稼いだ。併し彼は決して玄菴の家の前を通らなかつた。五町十町の廻り道はしても、二度とアン畜生の住んでゐる處に足は向けないと決心した。若し途中で向ふから玄菴の來るのに出つくわすと、彼はフィゴの荷をかついだまゝ往來の真中に立ちどまつて、ヤツの濟ました坊主姿を睨みつけるのだつた。併し彼はどうしても折々松坂屋の前を通らないわけには行かなかつた。黒塗の高い土藏造りが近所の家々を押へつける様に突立つて、大きな白字で松坂屋と染めぬいた紺暖簾が、朝日を受けて本石町の角を折り廻してゐるのを見たりすると、松五郎は玄菴を睨みつけるのとはスツカリ違つた心持で自分の體が急に縮まる様な氣がした。フィゴの荷をかたけた、洗ひざらしの絆天着の身すほらしさが、ヒシヒシと自分の胸に感じられた。羨ましいと恥かしいと、忌々しいと、馬鹿々々しいとがゴツチャになつて腹の中に煮えくり返るのだつた。

それでも松五郎は蟲を殺して、毎日々々「鑄掛屋で御座アい！」鑄掛屋で御座アい！」と觸れある

いては、鍋の底や釜の底をコッコツ叩いてゐた。

夏が来た。今年はや減法暑い。外働きには寒さもつらいが暑さもつらい。併し暑い夏にも涼しい夜がある。眞黒になつて稼いでゐる松五郎も、今夜はいつになく仕事を休んで、小ざつぱりした浴衣か何かで、近所の店先に始まつてゐる賭將碁を見物してゐた。

『オーヤオヤ、ひでい目に會はしやがつたなア。雪隠詰たアまア何てい哀れな王様だらう。俺アもう厭だ厭だ。一生涯將碁はさしッこなしだ。今日は之で一貫二百負けちやつた。忌めいましいぢやねえか。あの歩を一つ突き損つたのが運の盡サ、馬鹿々々しいや。あゝあゝけえつて寝よう寝よう』と、運の盡きた人は歸つて行く。それかと思ふと、跡はまた入れかはつて、あんまり運の宿つてゐるさうもない顔付のが一生懸命でやつてゐる。松五郎は之にも亦一つ考へさせられた。どうせ人の一生は賭將碁の様なものぢやないか。歩を一つ突きそこなつたか、銀を一つ打ちそこなつたか知らないが、何しろ負けた奴が馬鹿を見る。俺ア一生涯の負將碁をさしたくない。鑄掛屋で御座アいで鍋

の底を叩いてゐるたんぢやア、どうせじりじり貧乏の其の果が雪隠詰の王様だ。一貫二貫のマケカチぢやねえ。一生のマケカチだ。俺アどうあつても一旗擧げてえ。

賭將碁の連中は、若い鑄掛屋の頭の中にこんな大それた考へが浮かんでゐるやうなどとは勿論知らない。夢中になつて百か二百の目の前の勝負を争つてゐた。松五郎は『一旗擧げてえ』を腹の中に繰返しながら、矢張り黙つて跡の勝負を見てゐたが、フト又今度は、表の檯臺の上で始まつてゐる浮世話の聲が耳に入つた。

檯臺の上では、臺がへるのやうな口つきをした、齒の一本もないらしい老人が、折々遊團扇でタバタと蚊を追ひながら、自慢さうに『俺の若けい時分』の事を話してゐた。『其の時分はおめえ、あの松坂屋の角店のとこえ、まだ辻番のあつた頃だ。此あたりもまだ寂しかつたものだよ。松坂屋と聞いて松五郎の耳はピリツと動いた。『松坂屋があの大身代になつたに就いちやア、いろいろ面白い話があるわサ。何しろ今ぢやアあの通り折廻はしの角店で、裏にやア塗ごめの大土藏が幾戸前も

あつてさ、云はゞ大名のお城見ていなもんだ。大名ばかりが城を持つてゐると思つたら大間ぢけえだ。町人にも店といふ城があらア。大名は城持、町人は金持なんだが、其の金持は松坂屋なんといふ呉服城を持つてゐるわけサ。のう若けいの、さうぢやねえか。『暮がへるの老人は得意の浮世哲學に餘念がない。』

『おとつさん、松坂屋があの大身代になつたについて、いろいろ面白い話があるていなア、それは一體どんな話ですか。』松五郎はとうとう其そばにやつて来て斯う聞いた。『おう鑄掛屋の松さんかい。そりやアおめえ、恐ッそろしい話だわナ。マア聞きねえ。斯うだ。』

六 松坂城の富の由來

松坂屋の今の主人といふのは丁度松五郎と同じ年の十九で、手前物の贅を盡した濫い好みの着付で、色町に入りびたりといふお極りの若旦那。それは勿論松五郎も知つてゐた。併し今までそ

ふ御大家の若旦那と自分の身の上とを、幾ら同い年だと云つても、比べて見ようなどとは思ひもかけなかつた。

諸この若旦那徳次郎は、勿論店の商賣などには掛り構がない。商賣の方は髪を染めた六十近い後家のお銀がまだ頑張つて、男妾兼番頭の忠造を相手にして、中々確かりやつてゐた。之だけの事は勿論松五郎も知つてゐた。所でそれから遡ると、お銀の亭主、徳次郎の父親、即ち先代松坂屋徳之助は無事な人で、萬事女房に切つて廻はされてゐたといふより外に話がない。然るに其の又先代の徳兵衛といふのがエラ物で、之がシヨイ呉服から身を起して、一代の中にスクノと松坂城を築きあげた英雄である。

併し幾ら英雄でも、エラ物でも、正直正路にシヨイ呉服ばかりやつてゐたのでは、一代や二代の中に小城の一つでも築きあげるわけには行かない。そこに世の中のカラクリがあるのさ、と暮がへるの老人が得意の浮世哲學を講釋した。松五郎はスツカリこの老人の物識りに感心した。

徳兵衛は只のシヨイ呉服ではなかつた。實は内々でケイズ買をやつてゐた。『お父つさん、ケイズカイたあ何んのこつてすい?』松五郎はそいふ言葉を知らないほどのウブだつた。ケイズカイとはソレ、早い話が、泥棒の盗んで来た品物を内證で買ふ事さ。泥棒が衣類なり反物なりを盗んで来る。ウツカリ質屋にでも持つて行くと直ぐに足がつく。そこで平生からグルになつて、そのハカシ道をつける相棒が入用だ。徳兵衛はつまり泥棒の相棒だつたんさ。そこでヤツは泥棒の持つて来る上等の衣類なり反物なりを只の様な値段で買取つておいて、自分はシヨイ呉服が稼業だから何をしようとする人の目には着かない、其の品を方々に持つて廻つて高い値に賣りつける。それなら儲けもハカが行くわけだアね。そうじやアねえか、のう若けいの。世間には随分ぬけ道や、裏道や、近道があるもんさ。慕がへるの老人はいよいよ得意に話し進んだ。

俺だつて自分の目で見て来たわけぢやねえんだから好くは知らねえが、何でも徳兵衛はそれから段々手を擴げてケイズカイの大元締に成りすました。ハカの行く儲けを五年十年と續けてゐりや、

而もそれが段々大仕掛になつて見りや、ウント金も溜つたらうぢやねえか。そこで徳兵衛、もう好い加減に足の洗ひ時だと考へて、初めて松坂屋といふ呉服店をおつはじめた。シヨイ呉服からやりだして、とうとう店持になつたとすりや、如何にも堅氣なアキンドだ。ヤツはどこまでも其の堅氣なアキンドに見せかけた。徳兵衛さんはエライもんだ、辛抱の報いはあの通りだナンテ、知らねえ奴等は感心したり、賞めそやしたものだ。徳兵衛の野郎、さぞ腹の中でおかしがつて居たらうよ。少しはクスグツタイと思つたかも知れないが、そいふ圖太い野郎だから、世間は甘めえもんだ位にしか考へてゐなかつたらう。

尤も、最初の松坂屋はまだホンの小城よ。それが十何年目に一度焼けて、ザマア見ろと云つてやりたい様だつたが、悪運の強いヤツは仕方のないもので、メキ／＼と焼け太りよ。それでとう／＼今のあの素晴らしい大城が出来あがつた。そして徳次郎の女狂ひくらゐぢやア、一ゆるぎもしそうにない。

松五郎は息をはづませて此の話を聞いてゐた。淺黒い苦味ばしつた其の顔が、先年親爺の死骸の手をおさへて、『オヤ冷てい！』と思はず叫んだ其時よりも引締つてゐた。當今のはやり言葉で云へば極度の緊張を示してゐたとやる所だ。そして折々はキュツ、キュツと、其の締つた口元の筋が引き釣る様に見えてゐた。兩方の目からは焔のような者が輝きだしてゐた。

七 世の中のカラクリの底の底

ウム、それからまだ若けいの達、斯ういふ大事な話であらア。暮がへるの老人は更に話しつゞけた。徳兵衛の娘、徳之助の妹にお菊といふ器量よしがあつた。徳兵衛はそれをオトリにして上州の或る織元をつかまへた。呉服屋が織元をつかまへりや鬼に金棒だ。何んでも其ときお菊には、近處の若い男とネンゴロにしたのがあつたと云ふが、可愛さうに、徳兵衛は金輪際そんな事に頓着しなかつた。徳兵衛の眼中には娘であらうと何んであらうと總ての人間が皆んな自分の金もうけの道具

に過ぎなかつた。人情と金もうけは昔しから敵同志だからの、と老人は得意の警句を吐いて若い衆達の顔を一わたり見わたした。それでお菊は結局、泣顔の上におしろいを塗つて上州の織元田原屋に嫁入した。嫁人すりやア泣いても笑つても子が出来る。其の子は男だつた。そして運よく（徳兵衛に取つてはだよ）其の田原屋の主人が急病で死んだ。娘の不幸はいつでも親爺の幸ひだつた。徳兵衛は早速そこに駆けつけて、若後家の娘と跡とりの三つ兒との後見役になつた。娘と孫とが之ほど都合よく金もうけの道具になつて呉れようとは、さしもの徳兵衛も思ひがけなかつたらう。併し何と云つても現在の父なり祖父なりがシャ／＼り出て采配を振らうと云ふのだから、親類一同も異存の云ひ様がなかつた。それからと云ふもの、徳兵衛は江戸と上州との間を毎月の様に行つたり來たりして、田原屋の織元商賣をスツカリ自分でキリモリした。いよく／＼以て鬼に金棒だアね、内幕を知らない世間のお人よしは、こゝでも矢張り徳兵衛に感心して、子や孫の爲とは云へ、よくもマアあれほど眞身になつて、面倒を見てやる事だ。あれなら田原屋も萬歳だと、譽めたりソヤしたり

してゐた。世間といふものは甘めえもんだよ。

一體、この織元といふのは、何百人といふ大勢の織子を使つて、其の旨い汁を吸ふのが商賣だ。あの邊に行つて見なせえ、どこの内でもキーコンバタリコンと、年が年中、機を織つてゐる。それが皆んな織元に御奉公だ。尤も『上州名物、噂ア天下にカラツ風』といふくらいで、上州の野郎共は女房と娘とがセツセと機を織つて食はせて呉れるものだと思つて、好い氣になつて尻に敷かれてゐるのだから、其の女達の稼ぎ高も相應い、には違ひないのだが、何と云つても旨い汁は織元が吸つてしまふ。それを吸ふより外に織元のズンズン太つて行くわけがあるめえぢやねえか。あの蛭といふヤツを見なせえ。細い長い黒い物が水の中をチラチラ遊いでゐるが、あれが人の足に吸ひついて生血を吸ふと、見る見るうちに膨らんで来て、とうとう眞丸い大きな玉になつてしまふ。あれと同じだ。身代が太るには人の生血を吸ふより外に道がないのだ。して見ると、金持といふ者ア先づ人間の中の蛭だね。(老人の浮世哲學がいよいよ面白くなつて來た)。だからさ、何百人の女房達や娘

達の生血を吸ふ織元が太らなくてはとうするもんかい。それを其の女達は何ンにも知らないで、織元の方から自分達にもうけさせやても呉れるかの様に、織元様、織元様と崇め奉つて好い御奉公をしてゐるんだからお芽出たいものさ。亭主を立て養ひにしたり、色男に入れあげたりして、女の腕を自慢にしてゐる其の間に、有りがたい織元様からズンズン生血を吸はれてる事を御存じないとは、イヤハヤ氣の毒なわけのものさ。

所がさ、其の生血の塊まりの蛭の玉を、又横から吸はうといふ大蛭があるから驚くぢやないか。つまり田原屋といふ蛭の玉を松坂屋の徳兵衛といふ大蛭が吸つたんだ。其後、田原屋の若後家と息子とはどんな事になつたか、その所はよく知らないが、何んでも今ぢやア田原屋といふのは名目ばかりで、先づは松坂屋の出店と云つた格ださうだ。鬼が金棒を持つどこの段ぢやなくて、三本指の鬼の兩腕が其まゝで毛だらけの金棒になつた様なものだ。

だからよ、何んにしろ松坂屋のあの身代は、泥棒の上前を上手に刎ねたが元の起りで、あとは

娘の身の代金と云つてもいゝし、上州から流れこんだ何百人の生血の海だと云つてもいゝ。どうだ若けいの達、兎かく世の中は斯うしたものだ。オット喋つてるまに大ぶん夜がふけた。さすがに少し冷々として来たわい。どりや歸つて寝るとしよう。だがのう、若けいの達、今の話は極内だよ。松坂屋さんは分限者だ。貧乏人が分限者の影口をきくと罰が當る。こわやの、こわやの、桑原々々。暮がへるの老人は長物語にスツカリ溜飲をさけて、好い氣持になつて歸つて行つた。

跡に松五郎、どこまでが本當の事で、どこからが拵へ事か分らない様な話だと思つたが、兎にかく物知りの云ふ事に動きのない道理があると思つた。そして世の中のカラクリの底の底を初めてハツキリト見せられた心地がした。目はいよいよ焰を吹いて來た。息はいよいよはすんできた。折々唾をゴクリと飲みこんでは、只だ押しだまつて考へてゐた。

八 千兩箱が山ほど積んである

其の翌日から松五郎は矢張りセッセと稼いでゐるが、『鑄掛屋で御座ア』の觸聲が何だか妙に尖つてゐた。そして人と出會つても餘り口數をきかなくなつた。併し其の年の暮には、辛抱の塊まりが五兩ばかりの金になつて、彼れの胸巻にはいつてゐた。酒は固より一ツたらしだつて飲まなしいし、遊びなんかといふ事は夢にも知らないし、只だ胸巻の少しづゝ重くなるのだけ頼りにしてゐるが、一旗擧げてい『といふ大それた心が芽を吹いてから、少しばかりの其の頼りがタヨリなくて仕方がなかつた。或日、松坂屋の横丁で、尖つた聲を一段尖らせて『鑄掛屋で御座ア』を觸れてゐると、松坂屋の勝手口から呼び止められた。厭とも云へないで、女中が出した眞鍮の鍋を受取り、道ばたにフィゴをするて寒い風に吹きさらされながらコツ／＼とやり出した。『此の鑄掛屋さんはチョット好い男前だねえ。鑄掛屋さんには惜しいもんだ』と、あばずれの女中が毒口半分、愛相半分に話しかけたが、松五郎が返事もせず見向きもしないので、膨れた顔をして引込んで了つた。向ふからチャラチャラと雪駄の音がするので、ツイ顔をあけて見ると、若旦那の徳次郎だ。成ほど

自分と同年の十九ぐらゐだらう。何といふ物か知らないが、意氣な小袖を暖かさうに重ねて、結いたての水々した髪と、剃りたての青々したサカヤキとが、色白の細おもてを引立たせて、如何にも御大家の若旦那である。松五郎は其の姿を見るのが瘡にさわつて、直ぐに俯向いて鍋の底をヤケに叩いた。若旦那は鑄掛屋などに氣もつかないで鷹揚に行き過ぎてしまつた。

暫くすると、今度は使の戻りらしい小僧が側に來て突立つて、『鑄掛屋さん、之がフィゴといふもんかい。面白いなア、火が眞赤に燃えてらア。俺に一度そのスウスウといふヤツをやらせて見せて呉んないか』などと云ふのが松五郎はウルさくて堪らない。併し小僧はたうとうしやがみこんでしまつた。そして『今、内の若旦那がこゝを通つたらう。又女の處に行くんだぜ』などと話しかける。此の話には松五郎も相槌が打ちたくなつた。『女の處つて何處だい。』『兩國さ、何たらいふ藝妓が構つてあるんだツさ。それで若旦那は湯水の様にお金を使ふんだツさ。』『へエ！ 湯水の様に使ふんかい。』『そうだツさ。だけど幾ら湯水の様に使つたつて、減りつこはありやしねえや。三番の藏に

行つて見ねえ、千兩箱が山ほど積んであらア。』『おめえ其の千兩箱を持つて見た事があるかい』持てるもんかい、俺なんぞに。そりや重いもんだツさ。だが本當の事を云や俺アまだ見た事もねえ。』『馬鹿だなア此の小僧は。見た事もねえ物が山ほど積んであらアなんて云やがつて。』『だつて、そりや本當だよ、鑄掛屋さん。皆がそう云つてるんだもの。本當に山ほど積んであるんだツさ。ただ之は内證だよ鑄掛屋さん。泥棒がはいると大變だから。』

そこに勝手口の戸があいて先刻の女中が顔を出した。小僧はビツクリして飛で行つてしまつた。松五郎は鍋を仕上げて二百文の賃錢を受取つて、そして又フィゴをかついでスタスタと歩きだした。『鑄掛屋で御座ア』の觸れ聲はモウ出ない。頭の中には三番の藏に山ほど積んである千兩箱がアリアリと見える様な氣がした。それが皆んな泥棒の上前を刎ねた金なんだ。上州の生血の流れこんだ金なんだ。そして若旦那の徳次郎が湯水の様に使つてるんだ。そして小僧はそれを泥棒に取られては大變だと云つてるんだ。いつそ本當に泥棒がはいつて、根こそぎ引渡つて行つてしまつたら、

どんなに氣持がいゝだらう。

松五郎は今二百文かせいだ。そういふ二百文が一年あまり積もり積もつて胴巻の中の五兩ばかりになつてゐる。此上いつまで辛抱したらそれが千兩になるだらう。松五郎は歩きながら胸算をやつて見た。先づ一年に五兩と見て十年に五十兩、二十年に百兩、三十年に百五十兩、四十年に二百兩五十年に二百五十兩、千兩になるには百五十年でも足りない。馬鹿々々しい、人間がそんなに生きてゐられるかい、松五郎は鑄掛の荷物を放りだしたい様な氣がした。年が年中「鑄掛屋で御座あい」と觸れてあるいて、ヤット五兩の目くされ金を溜めて、後生大事にそれを胴巻に入れてゐる自分の腑甲斐なさに愛相が盡きた。一旗擧げるのはいつの事だか、此分ぢや見當もつかない。

九 覺えずフルフルと震へあがつた

松五郎は又一つ寂しい詰らない正月を迎へて、いよいよ廿歳の男となつた。もう好い加減に女房

を持つちやアどうだと、例の禿樂鐘の大家さんが會ふ度に勸めてくれる。俺が一つ素晴らしいのを世話してやらうと、口ぐせの様に云つてくれる。松五郎も萬ざら女の匂ひの嗅ぎたくない事はない。現に此あひだも、湯屋から出て來た、抜けるほど色の白いあだな姿の新造にツイ見とれて、あぶなくフイゴの片荷を往來の人にぶツつけようとした事があつた。鑄掛屋に相應したシミツタレな女房を持つ氣はないが、美しい女の顔は千兩箱と同じ様に、折々頭の中にチラついてゐる。それにつけても洗ひざらしの、はけちよろ袴天の自分の姿が淺ましくなつた。比ザマアして女どこの話しかいと、自分で自分を嘲らすにゐられない。それでも五尺三寸の堅実の苦味ばしつた立派な若い衆だ。たまには近處の娘達から、松さん松さんと味な目付で呼びかけられたりする事もあつたが、そんな者に目を呉れるには、餘りに大望がありすぎた。

それでも又半年ばかり「鑄掛屋で御座あい」と毎日尖り聲で觸れてあるいて、汗が目にとじみこむ夏が來た。

去年の夏の暮がへるの老人の話が此ごろ頻りと思ひだされる。世の中のカラクリがいよ／＼ハツキリと見え透いて来る。親があるぢやなし、獨り身の氣樂さだ。身内と云つても、別にシミジミ話しあふ程のは一人もない。友達は無いてもないが、ケチくさい野郎ばかり、相手になれない。いつも親切にしてくれる大家さんばかりは少し懐かしいが、之とても、只の世話好で一旗擧げる相談は掛けられない。お母ア、お父ア、俺アいよ／＼獨りポツチだ。何をやりだすか知れねえよ。二人で草葉の蔭から見えてくねえ。

松五郎は胸の中でこんな獨りごとを云ひながら歩いてゐるが、フト道ばたに少しばかり人だかりのしてゐるのが目についた。荷をかついだまゝ立止まるともなく側に寄つて覗きこむと、白髯の長い心學の先生が、土塀をうしろに小床を構へて、何か頻りに説法をやつてゐる。説法が面白いよりも、見越しの松の涼しい蔭が往來の人の足をとめてゐるらしい。

『總じて人といふ者は心の持方が肝腎だ。例へば此の松が枝だ。斯うして土塀の上から往來にさし

出てゐるが、此の下を通る人の心は様々だ。或者は何か心配事でもあつて夜ふけにトボ／＼やつて来る。月の影にフト仰向いて松を見上げる。あゝ首を釣るに恰好な枝振だと考へつく。そこで死神が直ぐに取りつく。えゝもう寧ろ死んでしまはうと、急に死ぬ氣になつて泣く／＼三尺帯とフンドシとを繋ぎあはせたりする事になる。それかと思ふと或者は又、頬冠りの黒装束か何かで、麻繩の先に石ころをくゝりつけたヤツを、行きなりアノ枝の少し凸んだ所へ目がけて投げかける。繩の先が石の力でクルクルと枝に巻きつく。其の手練は如何にもあざやか千萬だ。手練はあざやかだが料見が宜しくない。こやつ即ち泥棒であつて、繩をたぐつてスルスルと塀の上に這ひあがり、忽ち邸内に忍びこんで悪事を働く。同じ枝振の松を見ながら、一人は首釣りに恰好と考へる、一人は忍び込みの手がかりと考へる、そこが即ち肝腎な心の持方といふものだ。俺の様に此の松蔭を心學道話の定席に使ふか、それでなくとも此の涼しい松蔭でまゝよ一寢入りやらかさうと云つたフウな鹽梅式に考へると、自分も仕合せ、人も仕合せ、そこで世の中が天下泰平と相成る。どうぢや皆さん合

點が行つたか。』

松五郎はいつの間にもやら釣りこまれて、荷をおろして聞いてゐるが、黒装束の泥棒が繩をたぐつてスルスルと塀の上に這ひあがるといふ話の所で、松坂屋の裏通りの景色がヒラリと頭の中を掠めて通つた。松坂屋の裏通りにも丁度これと同じ様な松の枝が差し出てるのだ。續いて三番の藏に山の様に積まれてある千兩箱の景色もチラチラと目の中に閃いた。松五郎は覺えずブルブルと震へあがつた。

『そこで皆さん斯ういふ道歌がある。』心學の先生は又やりだした。『上見れば及ばぬ事の多かりき、下見て暮せおのが心に。何んと旨い事を云つたものだ。尤も、兩國橋に行くとなが逆になる。下見れば及ばぬ事の多かりき。涼み船や何かが羨ましい。そこで上見て通れ兩國の橋。上を見れば空と雲とばかりだ。目の毒になる者は一つもない。……』

『松さん、諦めなせえよ』と禿藥罐の大家さんが、親爺の死んだ時、繰返し繰返し言つた事を松

五郎は思ひだした。そして、心學も禿藥罐も、一切の世の中も、馬鹿臭くて堪らなくなつて、其ままスタスタと歸つて來た。

十 身代を半分呉れてやつた

其翌日の事でもあつたらうか、松五郎は又『鑄掛屋で御座アい』に出かけた。すると柳原の邊で十二三の小娘がシクシク泣きながらシヨンポリ立つてゐるのを見つけた。

『オイねえちやん、どうしたい』と、柔しく脊中を叩いて聞いて見ると、お父さんが病氣でお醫者を呼びに行つたが、藥代が滞つてるので來てくれない。それで仕方がないから今ま生ぐすり屋に熊の膽を買ひに來たが、今度はおあしを落してしまつたのだといふ。松五郎は親爺の死んだ時の事を思ひだして身につまされた。玄菴の畜生に對する憤りが悉く此の小娘に對する憐みに變つた。自分の親爺が今ま腹の中つて苦しんでゐる様な氣持もした。それで早速熊の膽を買つて小娘に持たせ

だが、どうも其まゝ、獨りで歸したくなくなつた。

『よし／＼兄さんも一緒におめえの内まで行つてやる』と、松五郎は娘を先に立て、狭い裏町にはいつて行つた。ナリこそ薄ぎたないが娘の後ろ姿にどこやら少し品がある。松五郎はそれが可愛くて堪らない様な気がした。

『兄さんこゝだよ』と娘が導いた路次奥の長屋にはいつて見ると、暑くるしい西日の部屋に、瘦せさらばうた年寄がひとり蠅にたかれて死んだ様に寝てゐた。『ウムお父つさんは寝てゐなさる様だ。起しなさんな、起しなさんな。そして今に目がさめたら其の熊の膽を飲ませなせえ。俺ア又あすでも見に来てやるからの』と云つてゐる中、松五郎はいよいよ其の娘が可愛くなつた。

暫くジツト考へてゐるが、やがて懐ろの胴巻から小粒で三兩取りだした。そしてそれを紙に包んで娘に渡した。『之はの、お兄さんがおめえにあける。おめえが孝行者で感心だから御褒美だ。お父つさんが目をさましたら、それを見せてお醫者を呼びに行きなせえ。可いかい。氣をつけなせえ。』

兄さんは又きつと来るからの。』

娘がおどおどしてゐる間に松五郎は表に出たが、又あともどつて来て、『おめえの名は何て云ふ。

何、お紺？。お紺ちゃんか。おゝ好い名だ。お兄さんはな、松五郎ていんだ。鑄掛屋の松五郎ていんだ。覚えておいてくんよ。』

松五郎は又鑄掛の荷をかついでサツサと兩國の方に足を向けた。あゝ好い心持だ。けふくれえ好い心持はねえや。俺の身代を半分呉れてやつた。俺ア目腐れ金なんぞ欲しくねえ。『鑄掛屋で御座ア』とさへ云つてりや、幾ら馬鹿臭くたつて其日々々の食ふだけの事は取れらア。食へなくなりやア死ぬまでだナンテ親爺は云つたけが、俺ア死ぬ前には是非とも大きく食つて見せる。あゝ好い氣持だ人を助けたなんて云や口は、つたいが、あの可愛いお紺と死にかゝつた爺さんとに俺の身代を半分投げだしてやつたと思や、俺ア嬉しくて仕様がねえ。マア之で又、今日は今日だけ稼ぐんだ。

十一 サア之からだぞ、之からだぞ

松五郎は兩國橋の袂まで来て、影になつた涼しい處に荷をおろして暫く休んだ。今日は生れて初めての大手柄をした様な気がする。いつそのこと、残つてゐる三兩あまりの金も誰かに呉れてやりたい様な気がする。金を溜めるといふケチな料見が無くなつて見ると、何んだか今日から新しい世界が開けて来た様な気がする。急に気が大きくなつて伸々とした様な気がする。何んしろ獨りで心うれしくて仕様がなない。

『おう鑄掛屋さん、丁度いゝ所だ。こいつを一つ見てお呉んなせえ。』之も隣りに休んでゐた屑屋の爺さんが、屑籠の中から古鐵瓶を一つ取出して松五郎に渡した。内側から日に透して見ると小さい穴が二つ三つあいてる。『どうにかかなりますかい。』「えゝ、どうにかかなりませう。』松五郎は氣軽くフイゴの火をおこしはじめた。

其の時橋の下から急に賑かな三味線の音が響いて来た。續いて張りあげた歌の聲が聞えた。松五郎と屑屋とは思はず顔を見あはせた。

『好い聲だなア』と先づ屑屋が感嘆した。『ふざけてやがらア』と松五郎は吐きだす様に云つた。屑屋は立上つて欄干にもたれて、『鑄掛屋さん、マアちよつと見なせえ、若けい衆にや目の毒だが。』松五郎は立たうとしなかつた。『マアちよつと見なせえ。意氣な屋根舟に差向ひでやつてやがる。』それでも松五郎は立たなかつた。

暫くすると今度は屑屋が、『女は藝者に違えねえが、男は何んだらう。あの風俗ぢやア上州あたりの生糸あきんどかな。何んしろ金に厭ひの無さそうな様子つぶりだ。』と獨り言の様にやりだした。上州といふ言葉が松五郎の耳に特別の響きを與へた。其の時丁度、歌の聲が更に新らしく起つた。松五郎もとうとう鐵瓶を提げたまゝで、立上つて欄干から見おろした。どつしりした四十男の顔が正面に見えてゐた。女の方は三味線の天神と横顔とだけ見えてゐた。『あやつもどうせ生血で膨らん

だ蛭だらう。』松五郎は斯う云ひすて、又仕事に掛つた。暮がへるの老人に聞いた織元の話が頭の中を往つたり來たりした、屑屋には蛭の意味は通じなかつたらうが『あゝあゝ、上見て通れ兩國の橋だ』と溜息をついて元の處に尻をするた。『屑屋のお父つさん、おめえさんは中々物識りだなア』と、松五郎は心學の先生の事を思ひだして云つた。『全くだ。之でも生れながらの屑屋ぢやねえからな。何しろ若けい時の事だ。おめえさんは羨ましい。もう斯うなつちやア、どうにも斯うにも仕様がねえ。正直は馬鹿の異名だ。正直者の身の終りは大抵かうしたもんなんだよ。時に鑄掛はもう出來たか。オット有りがてい。之で一步にでも有りつけりやア見つけものだ。』屑屋の爺さんは鑄掛賃を三百文拂つて、鐵瓶を屑籠に放りこんで行つてしまつた。

『成アるほど、正直者の身の終りは大抵あゝしたもんなかなア。俺アどうあつても、あんな一生涯の負將基はさしたくねえ。恥つさらしだ。見つともねえ。だが俺もモウいよいよハタチだ。其ハタチがもう半分は濟んぢやつた。一日一日で年が寄らア。うかうかしてゐると矢つ張り負將基だ。』

全くだ、モウうかうかしちやゐられねえんだぞ。』

松五郎は荷物をかたけて立上つた。松坂屋の裏通りの松の枝が又胸に浮かんだ。千兩箱も目の中にチラチラしてゐた。

『旦那、水の上もモウ飽きましたねえ。梅川にでも行つて飲み直しとませうか。ぢや船頭さん、梅川につけてお呉れ。』松五郎は此のなまめかしい聲を聞いて又橋の下を見おろした。丁度今度は女が船べりに顔を差しだしてこちらを見てゐた。此あいだ見とれた湯歸りの女よりか一段と美しくかつた。松五郎はゾツとした。廿歳の男の血が煮え立つた。船はそんな事に頓着なく、スルスルとそこを離れて行つてしまつた。

『畜生!』松五郎は肩の天秤棒を背中に廻はして両手を掛けた。其の両手はヌツト高く空中に差し延ばされた。鑄掛の道具は天秤棒の兩端に搖れながら、欄干を越して靜かに橋の外に突き出された。松五郎は川の面を見つめながら一度に其の両手を放した。道具も天秤棒もスウィツと落ちて、波の

間にドブーンと沈んだ。隅田川は平気で元の通りに流れ、兩國橋は知らん顔で元の通りに横たはつてゐた。往來の人々も丁度とだえて、誰も氣のつく者はなかつた。

松五郎はニヤリとして欄干を離れた。『あ、胸がスツトとした。之でいよいよ鑄掛屋の足が洗へた。サア之からだぞ！ 之れからだぞ！』彼はシヨザイのない兩手をぶらつかせながら悠々として歩み去つた。

▲以上書き終つた夜、私の夢に松五郎がやつて來た。曰く『わッしも今の時節に生れてリヤア、泥棒なんといふ馬鹿な眞似はしねえで、先生のお仲間になつて働きまッア。』私は松五郎君に先生と云はれたのが嬉しくて、『僕も昔の時節に生れてリヤア、君の子分にになつてたか知れない』と答へると、松五郎はニコニコ笑ひながら消えてしまつた。

(一九二〇年九月)

一 休 和 尙

▲『改造講談』『社會講談』『新式講談』など仰々しい吹聴をして置いて貰ひながら、先達て只つた一つ、『鑄掛松』の短篇を書いたきりでは聊か申譯のない心地がするので、丁度この正月を幸ひ、『門松は冥土の旅の一里塚』といふお目出たい所で二度目の一席を伺ふ事にした。

▲所が、この前のを書いた時、どうも君のは少し薬が利き過ぎて困るといふ、批評やら御小言やらをあちこちから受けたので、今度は精々餘計に古井の水をさして、二百倍の昇永ぐらゐな所でやる積りです。どうぞ其お積りで御読み取りを願ひます。

一 蟻川新左衛門との問答

蟻川『先日は御門前で、殊に馬上、失禮いたしました。』

一休『あの時は何處へ行かれた？』

蜷川（扇子を高く舉げて）『之へ参りました。』

一休『あゝ左様か。こなたは宛て字を使はれるな。』

蜷川『イヤどうも恐入りました。』

扇は戸羽と書く。蜷川が扇を舉げたのはトバに行つたといふ事である。併しトバは鳥羽と書く。

鳥羽を戸羽で済ますのは宛て字である。然し一休和尚と蜷川新左衛門との問答には、そんな説明は入らない。蜷川が扇を舉げて見せると、一休は直ぐに『あゝ左様か』とうなづく。そして一休が、

『宛て字だ』と突込むと、蜷川は一も二もなく恐入つてしまふ。

して見ると、禪學といものは丸で駄洒落と同じわけになるが、併し受け答への上手な駄洒落は大いに禪味を帯びてゐるとも云へる。言葉の洒落が心の洒落になつて、其の禪味が一層深くなる。

一休『時に蜷川殿、こなたの御生國は？』

蜷川『ハイ。禪師と御同國で御座います。』

一休『御兩親は何んと申されるな。』

蜷川『天地乾坤とも申し、地水火風とも申します。』

一休『成程。してお國には何か變つた名物でもありますかの。』

蜷川『イヤ別に變つたものもありません。鳥はカアカアと鳴き、雀はチュウチュウと鳴きます。』

一休『成程、さすがは博識の御仁だ。マア一つお茶でもあがれ。』

蜷川『然らば禪師、改めて御尋ね申す。人死して後、如何になりませう。』

一休『さればなア。……あゝコレコレ、臺所帳をちよつと持つて來なさい。……ハハア近江屋が番茶一斤、丹波屋が餅十三、奈良屋が葛一斤……』

蜷川『禪師、人死して後の問題は如何で御座いませう。』

一休『さればさ、人が死ぬれば此通り茶の子になる。』

蜷川少々ムツトした。忽ち脇差の小柄を抜き取り、庭の松が枝を目がけてビシヤツと一つ手練の手裏剣。羽を縫はれた一疋の小雀が芝の上にバサリと落ちた。蜷川行きなり縁側から飛びおりて其の雀を片手に握り、芝原の上から一休に向ひ、

蜷川「禪師、此の鳥は生きて居りまするか、死んで居りまするか。」

死んで居ると云へば其まゝ放し、生きて居ると云へば攫み殺して出さうといふ計略。

一休「さればなア。」

一休もおもむろに立上つて来た。そして縁の鬮を跨いだまゝて、

一休「蜷川殿、一休は今この部屋を出るか入るか。」

蜷川は持つてゐた雀を放して両手をバチリと叩き、

蜷川「今の手は右が鳴つたか、左が鳴つたか。」

一休「こなたは父親の子か、母親の子か。……ハハハ、蜷川殿、マアこちらにお上り。」

兩人は再び元の座に着いた。

一休「何なりと参らせたくは思へども達磨宗には一物もなし。モウ一つお茶でも上げられ。」

蜷川「一物もなきを賜はる心こそ本來空の妙味なりけり、有りがたくお茶頂戴いたします。」

一休「生れては死ぬるなりけり押しなべて、釋迦も達磨も猫も杓子も。」

蜷川「面影の變らで年の積もれかし、たとへ命に限りありとも。」

一休「面影の變らば變れ年も寄れ、無病息災、死なばコツクリ。」

蜷川「然らば禪師、地獄極樂は誠に在るもので御坐いませうか。」

一休「ウムある。」

蜷川「確かにありまするか。」

一休「イヤない。」

蜷川「確かにありませんか。」

一休「イヤ、矢つぱりある。」

蜷川「あるが誠か、ないが誠か。禪師、どちらで御座いますな。」

一休「どちらも誠ぢや。」

■蜷川「それでは禪師、あまりに取りとめが御座いません。地獄極樂はあるか、ないか。今一度、改めて御訊ね申す。」

一休「此の馬鹿奴！」

一休は側にあつた鐵如意を取りあけて行きなり蜷川の肩先をなぐりつけた。蜷川は驚いて居直つた。さすがに怒が心頭に發した。忽ち刀の柄に手を掛けて一休に詰め寄つた。

蜷川「瘦せても枯れても京都町奉行蜷川新左衛門。武士に向つて餘りの無禮で御坐らう。」

一休「振りかぶる太刀の下こそ地獄なれ。」

一休は悠然として空うそぶいて居る。

蜷川の口元が緩で來た。手は刀の柄から離れた。詰め寄せた膝を直して靜かに元の席に座つた。

一休「ヤレ／＼これで極樂々々。ハハハハハ。どうぢや蜷川殿。」

蜷川「恐れ入りました。地獄極樂の有無は確かに心得ました。所で今一つ、佛法の大意は？」

一休「佛法は鍋の月代、石の髻、繪にかく竹の友すれの音。どうぢや分るか。」

蜷川「イヤどうもそれだけでは分りかねます。」

一休「では此の次まで預けておく。」

蜷川「ハイ。……確かにお預り致します。……所で今一つ異なる事を伺ひますが。淨土宗で百萬遍のセメ念佛と申して南無阿彌陀佛を繰返し繰返し唱へますが、段々それが忙がしくなると、ナムアミダブツがナンマイダブとなり、もひとつ變るとナマイダア、ナマイダアとなります。あれでも佛に通じて御利益があるもので御座いませうか。」

一休「さればなア、それはどうも宗旨違ひでワシにも分らん。」

蜷川『では禪師、それだけは此の次までお預け致しおきます。』

一休『ウム宜しい。確かに預る。ナニもうお歸りか。それはそれは。』

蜷川『今日はお蔭を以ちまして十年の讀書にも優る學問を致しました。』

一休『イヤく、今の世に此の一休をやりこめる者は蜷川殿より外にあるまい。アツハハハ。』

蜷川『然らば御免。』

一休『ア、蜷川殿、蜷川殿。』

蜷川『何んで御座いまする。』

一休『イヤ何んでもない。』

蜷川『然らば之れで。』

一休『ア、新左殿、新左殿。』

蜷川『何んで御座いまする。』

一休『ハハハ、こなたは蜷川殿と呼んでも新左殿と呼んでも返事をしなさるのう。』

蜷川『勿論。わたくしは蜷川新左衛門で御座いまする。』

一休『左様か。其の蜷川新左衛門を蜷川と略しても新左と略しても御本人に通じる所が有りがた

いものさのう。』

蜷川『ア、成ある程。それでナマイダアが佛に通じる。禪師、たうとう最後に又一つ恐れ入りました。』

一休『アハハハハ。』

蜷川『アハハハハ。』

二 門松は冥土の旅の一里塚

或年の正月元旦の事、一休はいつもの通り墨染の古衣に破れ草履をはいて、年頭の廻禮に出かけ

た。京都の名刹、紫野大徳寺の住職、日本中に名の高い一休大禪師とは逆も見えない。丸で乞食坊主といふ風體だ。それに銅色をしたピカピカ頭を寒い風にさらして、笠も頭巾も冠らうとはしない。禪師はナゼ冠り物を召しませぬかと誰か聞いた時、イヤわしは大空といふ世界一パイの阿彌陀笠を冠つてゐるのぢやと笑はせた。今日でも高木兼寛さんの、山崎今朝彌君だのといふ無帽主義の人があるが、あの連中は蓋し一休和向を開祖と仰いでゐるのかも知れない。尤も高木さんはエライ頑固な愛國者でいらつしやるから（イヤ、いらつしたのだから）世界一パイの阿彌陀笠ではなく、日本の空に限つた、何かの御威光を笠に着てゐたのかも知れない。

餘談はさておき、正月元旦の晴々とした京都の市中にふさはしくもない、此の身すほらしい一休が、片手に變な竹竿を持つてゐる。竹竿は大して不思議な物でもないが、其の竹竿の先に變な物がくつついてゐる。見るとそれが人間のシヤリコーベだ。目の玉の抜け出たあとの大きな黒い穴が二つ、やつぱり人を睨みつけてゐるように見える。齒ぐきの骨はやつぱり齒を食ひしばつてゐるよう

に見える。淺ましくもあれば物凄くもある。一休はやがて其のシヤリコーベのついた竹竿を振りちらして『ヤレ目出たいな、目出たいな、正月は目出たいな、元日は目出たいな』と、跳るようにして都大路を練りあるいた。綺羅を飾つて行違ふ男女老若が目を聳て、近寄ると、ソーラ目出たい！ソーラ目出たいと、其のシヤリコーベを目の先に突きつける。アール、アールと女子供が逃げまどふと、アツハハハハ、目出たいぞ目出たいぞと、又ふらふら跳つて行く。

「禪師、禪師、相變らず御機嫌で御座いまするな、シヤリコーベの目玉が飛出して先づお目出たう御座いまする。」と云ふのは、丁度向ふから來かゝつた道服姿の蜷川新左衛門。

「イヤ新左殿、何より之が目出たい目出たい、どうぢや、此のシヤリコーベは一休に似て居ようがな。」（一休は竹竿を杖についてシヤリコーベの顔を蜷川の方に向けてゐる。）

「成程、そう仰しやれば好く似て居ります。然し蜷川には、モソツト好く似て居るようで御座います。」（蜷川はためつすがめつシヤリコーベの顔を打守つてゐる。）

「アハハハハ、之に似てゐんようではお互に人間でないワイ。時に新左殿、わしは之から錢屋久兵衛の宅に年始に行く。どうぢやあこで一こん屠蘇を酌まうか。」

それから蜷川は後刻を約して別れて行く。一休は再びシャリコーベの竹竿を振りまはして、目出たいぞ目出たいぞ、目出たいな目出たいなと跳りながら四條室町上ル錢屋久兵衛方にやつて来た。久兵衛方は錢屋とは云ふものゝ今の商賣は米屋で、京都中で指折りの分限者である。表は奇麗に掃き清めて、キチンとした見事な門松が物靜かに立つてゐる。「お、大徳寺の一休様がお出でなされた。」『紫野の禪師様がお越しなされた。』と店の者共が飛び出して来る途端、「アレこわい！」「アレこわい！」と羽子をついてゐた近所の娘達が金切聲を擧げる。店の者共も初めてシャリコーベに氣がついてギョットしたが、此の和尚様に向つて滅多な事は云はれないので、氣味わるわると黙つてゐる。

一休は上機嫌のニコニコ顔で、竹竿を門松の盛砂の中にズカリと突きさし、シャリコーベの顔を

眞正面に往來に差し向け、「コレコレ皆の者、此の福の神にさわつてはならんぞ。久兵衛は在宅か。一休が屠蘇の馳走に預りに来たと申せ。」

やがて主人が迎へに出て一休は奥の座敷に通された。久兵衛はわざとシャリコーベの事など知らん顔をして、ソレお屠蘇、ソレお雜煮と取りなしてゐる。一休は例のニコニコ顔でグビグビと屠蘇を飲みながら、

「ほほう、床の間に美しい物が飾つてある。あれは何んぢやな。」

「あれは御存じの目白鯛と申しまして、世の中で一方の頭になりまするようにと、あれを飾つて祝ふのだそつて御座います。」

「ほほう。あの下に敷いてあるのは何んぢやな。」

「あれは齒袋で御座います。」

「ナニ死んだ？」

『御冗談を。あれは山草とも申します。』

『ナニ病ひ草？』

『エへへ、どうも困りましたなア。あれは裏白とも申します。』

『お、裏白とも云ふか。成程、白い物は清浄だ。棺桶なども白布で巻く。』

『どうも恐れ入ります。元日早々ロクな事は仰しやりません。マアどうぞお雑煮でも召し上つて。』

『ハイ、頂戴ませう。時に御主人、此の箸はえらい太い物ぢやのう。』

『太箸と申すので御座いますから、精々太く作らせました。どうか其の通り身代が太くなるようにと存じまして。』

『あ、成程。然し御主人、斯様に後先が細くて中程が太い所を見ると、身代も初は細くて中程に段々太くなつて、それから又末は段々細くなるものと見えるのう。』

『どうも恐れ入ります。そう一々難癖をおつけ下されてはやりきれません。マアどうぞお雑煮のお

代りでも。』

『ハイ、有りがたう。ア、久兵衛、齒が抜けた。』

『又しても縁起でもない事を仰しやいます。どうかモウ御勘辨を願ひます。』

『イヤ安心しなさい、齒ではなかつた。然し妙な事ぢや、餅の中から此の通り銀の玉が出た。』

『あ、それは和尚様、お目出たう存じます。毎年一ツづ、餅の中に銀の玉を入れて置きますが、それを食べ當てた者は金持になると申します。』

『あ、左様か、それは有りがたい。然し久兵衛、餅の中にカネを入れたりすると、此の身代は今にモチカネルぞ。』

『モウどうか和尚様、御勘辨を願ひます。身代が細るの、持兼ねると仰しやられましたは、商人は丸で身を切られるような心持が致します。』

『成程、成程。それは悪るか。一休があやまる。時にあの目白鯛はいつまであ、して飾つて置

くものぢやな。』

『左様で御座います。あゝして廿日まで飾つて置きまして、廿日にはあれを焼いて家内一同が骨まで残さず戴くので御座います。』

『あゝ左様か。して見ると今の中は曝し物で。獄門といふわけだな。そして廿日になつて骨上げをするか。』

『和尚様、まだ私をおいぢめなされますか。どうぞモウ今日だけは眞平御勘辨を願ひます。……此の通り手を合せてお願い致します。』

『ハハア、其の手を合せた所に珠数でも掛けると丸で亡者といふ恰好だ。』

『和尚様、餘りそれでは殺生で御座います。どうぞモウお助け下さいませ。』(久兵衛は弱りぬいて今にも泣きだしさうになつた來た。)

『イヤ悪るかつた。一休があやまる。では御主人、斯うしよう。一つ祝ひ直しにワシが一つ目出た

い歌を書いて進ぜう。』

サア久兵衛大喜びで、早速墨を磨らせて唐紙を展べさせた。一休は又グビリグビリ屠蘇をやつてゐたが、やがて筆を取りあけてスラスラと書いてのけた。

『門松は冥土の旅の一里塚』

目出たくもあり目出たくもなし』

『どうぢや久兵衛、これなら好からう。一つ門松を見て來さつしやい。』

久兵衛は一休の書いた歌をジツト眺めて考へこんでしまつた。もう勘辨してくれとも助けてくれとも云はなくなつた。

『どうぢや御主人、一度表の門松を見て來さつしやい。冥土の旅の一里塚を見て來さつしやい。』

『イヤもうシャリコーベの竹竿は存じて居ります。就きましては和尚様、改めて御教訓を願ひたい事が御座いまするが、若し御構ひなくば席を改めてゆるく薄茶でもお上り下されますまいか。』

「ナニ薄茶、それは結構、後刻蟋川も参る筈ぢや。ゆるく居れとなら三年でも逗留する。若しそちらにさへお構ひなくば、ついでにこの茶室で骸骨になつてもワシは構はん。アツハハハ。」

三 金銀財寶は地獄までは持つて行かれん

それから久兵衛は離れの茶室に一休を案内した。數奇を凝した二疊中板の一間がヒツソリカンとして、釜の湯がシンシンと鳴つてゐる。久兵衛は茶を立て、一休にすゝめ、自分も一椀ゆるゆると呑みほした。

『時に和尚様、御存知の通り私には後嗣が御座いません。』

『……………』

『四人目の末子が男で御座いましたので、三人の娘共は皆それぞれ他家に遣はしました處、其のあとで悴が若死に致しました事は御存知の通り。私もモウ五十の坂を越えまして、先々の事を案じま

すると誠に心細う御座いまする。

『……………』

『先祖のお蔭で折角これまでに仕上げました身代を、此先きどうすればよいもので御座いませう。』

『……………』

『自慢では御座いませぬが、今この都で錢屋と申しますれば、先づ指折りの中に數へられて居ります。それをムザムザ人手に渡しますのは如何にも心残りです。御座いまする。』

『フム……………』

『養子ませよせよと娘共も申し、親類中でも勧めて呉れますが、扱て安心の出来る、之ならばと申す程のが中々見つかりません。』

『フム……………』

『と申して此ま、月日が立ちましては、先刻のお歌の通り冥土の旅の一里塚が段々に重なりますわ

けで、私の旅がいつ終らうやら知れませぬ。それでは折角の此の錢屋の血筋が絶えますわけで。」

「フム。……………」

「それであの大和屋、御存知の通り姉嬢の参つてゐる先、それから兵庫屋、中の嬢の参つてゐる先、それから和泉屋、末の嬢の参つてゐる先。いづれも子供が御座いまするので、其の中を一人貰ひつける事にすればよいとも考へますが、それにしても何んとやら私には安心が出来かねます。」

「フム。では久兵衛、あの若死した末の子が丈夫でゐたら、こなたはそれで安心が出来たのか。」

「それはもう何より安心で御座います。」

「へエー、あの子は道楽をせぬと極つてゐたのか。女狂ひをせぬと極つてゐたのか。身代を持ちくづさぬと極つてゐたのか。商賣でしくじらぬと極つてゐたのか。」

「成程、それは極つては居りませぬが、我子の事なら致方も御座いません。」

「ハア、我子の事なら致方がない。所で、大和屋の子供、兵庫屋の子供、和泉屋の子供、あれらは

皆こなたの孫達ではないか。」

「左様で御座います。」

「我子の事なら致方がないとすれば、我が孫の事でも致方がなさうなものぢやがな。」

「でも。……………」

「ハア孫ではいかんか。よしよし、では久兵衛、大和屋の嫁、兵庫屋の嫁、和泉屋の嫁、皆こなたの娘ぢやの、娘は子じやの。」

「左様で御座います。」

「では此の錢屋の身代を三人の娘に分けてやつたらどうぢや、娘がそれをどうしようと我子の事なら致方がない。」

「でも和尚様。娘の嫁入先とは申せ、和泉屋も兵庫屋も大和屋も皆な他家で御座います。」

「アハア成程、他家か。我子でも他家はいかんか。こなた先程は血筋と云ひなされたが、それでは血

筋ではなくて家筋が大事ぢやの。』

『ハイ、其の家が何より大切と存じます。先祖代々から斯うして傳はつて來た此の錢屋で御座いますから、私の代になつて此の家を潰しましては申譯が御座いませぬ。』

『ア、左様か。家が大切か。それなら久兵衛、早速この家を石造りにする事ぢや。大丈夫な石造りにさへして置けば、水にも流れず火にも焼けず、錢屋の家は萬々歳ぢや。』

『和尚様、家と申すのは此の建物の事ばかりでは御座いませぬ。建物ばかり何んほ石造りに致しましても、中の身代がカラになつてはモウ錢屋は潰れたので御座います。』

『ア、左様か。家よりも身代が大事か。身代と云へば、こなたの貯へてゐる金銀財寶の事ぢやの。それでは久兵衛、わしに妙案がある。どうぢや教へて進ぜうか。』

『どうぞ御願ひ致します。』

『では久兵衛かうさつしやい。早速一つ四間に二間の大棺を拵へる事ぢや。それでもまだ小さい』

と思ふなら、四十尺に二十尺でもよい。そして其の中にこなたの金銀財寶を皆んな入れる。そしてこなたが病氣になつたら、其の中に寝る事ぢや。さうさへして置けば何んとき死んでも大丈夫。金銀財寶は皆んな持つたま、地獄に行ける。之れほど安心な事はあるまい。どうぢやな久兵衛。』

『和尚様、私は眞劍で御座います。其のやうな御冗談は、今日だけはどうかお止めを願ひます。』

『イヤ冗談どころぢやない。わしも眞劍ぢや。それともこなたイツソのこと、あの裏の大倉に寝起をして、あの中で金銀財寶に取りまかれて死なしやるか。そして倉のまはりに大穴を掘つて倉ごと地の底に埋めて貰ひなさるか。それなら棺を拵へるだけの手数も掛らず、費用も大きに省けるといふものぢやがの。』

『イヤ和尚様、分りました。無智無學な私でも和尚様の御教訓はよく分りました。如何にも金銀財寶を身につけて死ぬるわけには參りません。そこで私はいよいよ心残りが致すので御座います。』

『ハハア、金銀財寶は地獄まで持つて行かれんか。それは困つた。では久兵衛、もひとつワシに妙

案が浮かんだがどうぢや。」

『是非それを伺はせて戴きます。』

『そうか。それは斯うぢや。こなた一つ、有りたけの金銀財寶を使ひすて、しまいなさい。金銀財寶があればこそ心残りがある。娘にやつても孫にやつても養子にやつても安心が出来ん。ましてや貧者に施すなど思ひも寄るまい。人手に渡すも厭、地獄にも持つて行かれんとすりや、自分で使ひすてるが一番ぢや。何んほ錢屋が指折りの大分限でも、毎日毎晩こなたが一生懸命になつて、片はしから湯水のやうに使ひすてたら、いつか無くなる時が来るぢやらうぞい。』

『どうも和尚様、その御妙案では私に得心が参りません。私は自分で此の身代を使ひすてるなど、そんな勿體ない事は逆も出来ません。私は只、此の身代と此の商賣とが益々繁昌して行きますのを草葉の蔭から見て居たいので御座います。』

四 他人の汗あぶくを絞り取る道具

『ほう、草葉の蔭といふ處からは、此の世の事が見えろと思ひなされるかえ。』

『どうか存じませんが、マアそんな氣が致すので御座います。』

『ウム、それはマアそれでよいとして。すると、こなたは何んぢやな。血筋ぢやの、家ぢやの、金銀ぢやのと云ひなされるが、つまるところが此の商賣が大事ぢやの。此の商賣が繁昌して行きさへすりや子が無うても諦らめがつく。金銀財寶を人手に渡しても安心が出来ろ。死んでも成佛が出来ると、斯ういふわけぢやな。こなたの身代といふのは、つまり米屋商賣の事ぢやの。』

『マアそんな事で、も御座いませうか。身代あつての商賣、商賣あつての身代で御座います。若しか此の商賣が廢れて、此の身代が潰れましたら、家も血筋も何になりませう。』

『成程、よく分つた。如何にも商賣は大切なものぢや。商賣が無うなれば身代が無うなる、身代が無

うなれば家も血筋も何んの役に立たぬ。如何にもよく分つた。如何にも商賣は大切なものぢや。したが久兵衛、此の米商賣がこなたの家の爲めに大切なほど、それほど世間の爲にも大切であらうかのう。』

『和尚様、人間米が無うては一日も生きて居られますまい。』

『成ほどなア。併し久兵衛、此の錢屋の店が潰れると、京都中に米が一粒も無くなるぢやらうかのう。』

『サアそれは如何で御座いませうか。』

『いやさ久兵衛、こなたの店が潰れると、京都の人は皆な餓ゑて死ぬるぢやらうかのう。』

『サアそれは如何で……』

『いやさ久兵衛、米屋といふ商賣が無うなると、百姓の作つた米が皆な消えて無くなるぢやらうかのう。』

『サアそれは如何で……』

『いやさ久兵衛、百姓が米を作つて、其の百姓が其の米を京都に持つて来て、京都の鍛冶屋の食べ料として渡す。すると其の鍛冶屋は鍛ぢやの鋤ぢやの鎌ぢやのを其の百姓に渡す。それではお互の暮しが立たんものぢやらうかのう。』

『成程、和尚様の理づめには恐れ入りました。併し和尚様、百姓が手ん手に遠方から米を運んで参りましては、其の手間暇が大變で御座いませう。そこで米屋といふ商人が出来まして、百姓と鍛冶屋と双方の便利を計るわけのものであらうかと私は存じまするが。』

『成ある程、これは一休参つた。さすがにこなたは發明な商賣人ぢやわい。すると何んぢやの。商賣人といふ者は只だ仲繼の役目をするだけのものぢやの。』

『左様に存じまする。』

『ハハア。所が久兵衛、こゝに一つ不思議な事がある。百姓は米を作る。鍛冶屋は鍛や鎌を作る。』

船頭や馬方は荷物を運ぶ。皆それぞれの役目をしてゐる。こなたも仲繼の役目をしてゐる。世の中に御奉公する役目は皆な同じわけぢや。所が久兵衛、百姓も鍛冶屋も船頭も馬方も、一生働らいて只だ口過ぎをしてゐるばかりぢやが、仲繼役の米屋だけが獨りメキメキと大身代を作りあげたのはは久兵衛、一體どうしたものぢやらうのう。』

『左様で御座います。其の邊の事はどういふものか、私にもよく分り兼ねますが、併し商賣には元手も入る事で御座いまして、御存知の通り私の家は元と兩替屋で、それで錢屋といふ屋號も残つてゐるので御座いますが、其の錢商ひで溜つた少しばかりの金銀を元手にして先祖の久兵衛が米屋をやりだしたのぢやと聞き覚えて居ります。只今では其の元手が随分と大きなものになりました、それが即ち錢屋の身代で御座いますが、其の元手が子を産むとでも申すので御座いませうか、そこが世に云ふ商賣冥利ぢやと心得て居ります。』

『成ある程、世間の學問といふものは又別ぢや。佛法の事ならワシも大抵心得てゐる積りぢやが、

世間の學問では逆もこなたに叶はんわい。』

『これは又滅相もない。私の申す事を學問ぢやなどとは。』

『いや、それが學問ぢや、經濟といふ學問ぢや。併し久兵衛、其の元手といふ不思議なものは最初の少しばかりは錢商ひで出來たにせよ、何で出來たにせよ、後にそれがメキメキと大きくなるのは、それは一體、何處から出て來るものぢやらうかのう。』

『サア、それは如何で……』

『學者にも分らんか。まさか天からも降るまい、地からも湧くまい。百姓、鍛冶屋、船頭、馬方、乃至は丁稚小僧の汗あぶらの塊りではあるまいかのう。』

『サア、それは如何で……』

『若しかワシの云ふやうぢやとすると、元手といふ不思議な者は、喩へて云へば先づ人の汗あぶらを絞り取る道具ぢやの。恐ろしい道具ぢやの。して見ると、此の錢屋の身代、此の錢屋の金銀財寶

家倉といふものは、皆な悉く他人の汗あぶらの塊りで、そして又、引續き其の汗あぶらを絞る取る道具ぢやの。恐ろしい道具ぢやの。』

「和尚様、それは餘りお意地の悪い仰せで御座います。私は御存知の通り、常に神佛をも信心いたし……」

「成程、成程。こなたは信心者ぢや。それはワシもよく知つて居る。それぢやからこそ大徳寺の檀家ぢや。そこでこなたには商賣其利がある。併し久兵衛、神佛はエコヒイキをなさるものぢやの。元手を持つたものには澤山の御利益をお授けになる。元手のないものには貧乏をお授けになる。儲々神佛は有りがたいものぢや、尊といものぢや、忝じけなないものぢや。アツハハハハ。』

五 自來也と世の末

「蟻川様がお越しで御座います。』

丁稚が蟻川新左衛門を茶室に案内して来た。蟻川も今は町奉行を隠居して、一休和尚のお弟子になつてゐる。道服姿で遠慮なしにズンズンとはいつて来た。

「禪師、冥土の旅の一里塚はチト薬が利き過ぎはしませぬか。久兵衛殿、如何ぢやな。』

「今日はどうも和尚様からエライ目に會はされて居る所で御座います。錢屋の身代は他人の汗あぶらの塊まりぢやと仰せられます。私の方が和尚様から汗あぶらを絞られて居ります。』

「アハハ、これは久兵衛大出来ぢや。時に新左、こなたは自來也の噂を聞かれぬか。』

「聞きました。様々の噂を聞きました。お話しませう。久兵衛殿、先つお茶を一服戴きたい。』

久兵衛は茶を立て、蟻川にすゝめた。蟻川はそれを啜つてからおもむろに語りだした。其の話はザット斯うだ。

先頃から自來也といふ怪賊が所々に忍びこみ、金銀、財寶、衣類、何に限らず盗み去る。忍術の達人といふ事で、誰も其の姿を見た者が無い。併し奴が忍びこんだ處には、壁なり襖なり衝立なり

に、必ず「自來也」と大きな字を書き残して行く。そこで怪賊自來也の噂が京の内外に響きわたつて、人々安き心もない。」

「今に此の錢屋にも來そうなものぢや。のう久兵衛。」

一休は主人の顔を覗きこんで斯う云つた。

「和尚様、飛んでもない。」

「いや、いや。自來也ともあらう者が、之ほどの金銀財寶を見棄てて置く筈がない。のう新左殿、そうぢやないか。」

蟠川は笑ひながらそれには答へないで、「まだ斯ういふ話が御座います。」

自來也は只の盜賊ではない。奴には謀叛の企てがある。或ひは南朝の殘徒であるかも知れない。現に此の年の暮に、江州の慈悲心ある分限者と稱して、四條河原に大釜を据えて炊出しを爲し、洛中洛外に觸れを廻して、乞食、無宿、浮浪、窮民の徒を呼び集め、茶粥の振舞と同時に金錢衣服の

類をも頒ち與へた。其時、一人の大男、髪には百日鬘を冠り、肌には鎖かたびらを着し、忽然として群集の中より跳り出で、小高き處に突立ちあがつて、我こそは自來也なりと大音聲に名乗りあけた。そして群集に向つて斯ういふ意味の演説に及んだ。今の世の政道は亂れに亂れてゐる。上なる者は徒らに驕奢に流れて民を恤む事を知らず、中なる者は頻りに富を積んで獨り天下の利を盗む。下なる者は上中二つの力に押されて、窮乏零落の淵に陥る。餓ゑたる者に食を與へず、凍へたる者に衣を與へざる世は必ず亡ぶ。今に見よ、今に見よ。時が来る、時が来る。自來也一たび起つと聞かば、汝等必ず集まり來れ。自來也は今汝等に誓ふ。其時必ず、汝等に食物を與へ、衣服を與へ、黄金を與へん。此の世に有りと有らゆる善き物を皆に分ち與へん。自來也を信ぜよ。自來也を信ぜよ。自來也の作り出だす極樂世界を信ぜよ。

町奉行の配下なる捕手の者は此の怪しからぬ次第を聞いて、直ちに四條河原に駆けつけたが、其時にはモウ自來也は夕闇に紛れて姿を消してしまつてゐた。そこで洛中の貧民共は今にも自來也が

極樂世界を作りだして呉れるように、楽しみ楽しんで待ち構へてゐる。

「人心變を思ふといふのは洵に此の有様で御座いませうか。」と、蜷川は其の話を結んだ。主人の久兵衛は初めてそんな話を聞いて、只キョトンと呆れ顔をしてゐた。

「世の中は面白いな。今に錢屋が自來也の本陣になるかも知れん。」一休はこんな事を云つてニコニコしてゐた。

「和尚様、又しても其のやうな……」

「いゝや知れん、今に此の茶室が自來也の休息所になるかも知れん。」

「和尚様！」

「いゝや何んと云うても明日の事は知れん。錢屋の米倉が自來也の炊出し場になるかも知れん。」

「和尚様！」

「久兵衛が何んと云うても世の中の事はどうなるやら知れん。錢屋の倉の金銀財寶が皆んな自來也

に分捕されて、洛中の貧乏人に分けられてしまふかも知れん。」

「和尚様！」

「もう諦めなさい久兵衛。物した物が物される時が來たのぢや。搾つた者が搾られる時が來たのぢや。」

「和尚様、それでは全く世の末で御座いまするなア。」

「あゝ世の末ぢやとも、世の末ぢやとも、こなた達の世の末ぢや。」

「昔しから世の末は毎々あつた。」蜷川は獨りごとのやうに斯う云つた。「藤原の世の末、平家の世の末、源氏の世の末、北條の世の末、そして今度は……」

「オット待つたり。足利の御代だけは萬々歳！……。」一休がそこに口を入れた。

「久兵衛、併し嘆く事はない。形ある者は必ず滅し、生ある者は必ず死す。滅すれば又現はれ、死ぬれば又生れる。古い世の末は新しい世の始めぢや。年が暮れて年が明ける。目出たい、目出た

い。正月は目出たい、元日は目出たい。久兵衛もう好い加減に悟りを開かつしやい。サア新左一緒に歸らう。』

(一九二二年一月)

大鹽騒動

一 人間といふ奴は馬鹿なもの

讀者諸君の中には天保錢といふ物知らない人もあるだらう。私は此あいだ四谷の夜店で久しぶりあれに對面した。何しろアノ小判形の真ん中に四角な穴のあいた、アノ大きなズウ體をしてるながら、明治の世の中では八厘にしか通用しなかつたのだから、『少し足らん』とふ符牒に使はれたも無理はない。五錢の穴あき白銅を大正時代のシンボルとするなら、天保錢は即ち天保時代のシンボルだ。

然し『天保人間』といふ言葉は必ずしも『少し足らん』人間といふ意味ではなかつた。舊弊な人間、頑固な人間、時勢に後れた人間が即ち『天保人間』だつた。今日生き残つてゐる『天保人間』は、山縣有朋、大隈重信、松方正義あたりより外には先づあるまい。所が、アノ人達は夜店にも出されず、今だに何んのかのと頑張つて居るから驚く。

餘談はさておき、其の天保の八年に大鹽騷動が起つた。丁度今から八十四年前と云ふと、随分古い昔しのようにも聞えるが、其の中から大正の十年と、明治の四十四年と、合せて五十四年を引き去ると、あとは只つた三十年だ。徳川幕府の仆れた時から只つた三十年前の事だ。何しろ當時は二百幾十年の太平が打續いた後であつて、そこに忽然として、ソレ火矢だ鐵砲だ、ソレ謀叛だと來たのだから、謂ゆる晴天の霹靂なるもので、全く途方もない大騷動であつた。然るに其の大騷動が只つた一日で鎮まり、其の跡片付も一月二月の中に済んでしまふと、人間といふ奴は馬鹿なもので、徳川の御代は又萬々歳だと思ひこんでゐた。所が、それから只つた三十年で明治の新社會が生

れた。世の中の變遷といふ事を考へると、面白くもあれば恐ろしくもある。

實はもう少しこゝで何か小理屈を云つて見たいと思ふのだが、マア云はずに置く。私が云ふよりか諸君に考へて貰ふ方がいゝだらう。

二 天より下され候書付

扱、天保八年二月十九日早朝の事、河内國尊延寺村の百姓男が二人、鍬を杖について麥畑のはしで立話してゐた。

『彌助どん、お前に一つ見て貰ひたい物がある。これは何んぢやろな。』

『ハテね。お觸れでもない様ぢやし、お守りでもない様ぢやが、久作どんお前こんな物どうして持つてなざる。』

『サアそれがよ。けさ俺がうちの窓の中に投げこんであつた。何んぢややら薄氣味がわるいので、

鼻アにも云はずにジツト懐ろに入れて来た。」

『ハテね』と、彌助は鞆を放り出して、一尺ばかりもある黄色い薄絹の袋の中から一つの書付を抜きだして、其のうわ書を打眺めた。彌助は少し字が読めるらしい。

『天より下され候書付……』

『ナニ、天より下され候書付！。それぢや彌助どん。天狗が投げこんで行つたものか。どうも俺、只事でないと思つた。』

彌助は小首を傾けたが、『久作どん如何にもこりや只事でないわい。』天より下され候書付……そして『村々小前のもの共に至る迄』と添書がしてある。』

『フン。それぢや彌助どん、マア中をあけて、どんな事が書いてあるか読んで見て下され。』

彌助は恐る恐る其の書付を擴げた。西の内五枚繼の版行摺で、『四海困窮せば天祿長くたゝん、小人に國家を治めしめば災害至る』と、草書平假名交りで書きだしてある。

『イヤア、これは俺れなんぞの讀めるものぢやないわい。ぢやかの彌助どん。俺はすこし思ひ當る事がある。ヒョツトすると、これは大鹽平八郎様かも知れんぞ。』

『大鹽平八郎様！。オウ、此あひだ俺達に一朱づつ施行をして下された……』

『ウム、それよ。あのお方よ。これは一深尾の才次郎さんにお尋ね申して見よう。才次郎さんは大鹽様のお弟子ぢや。百姓の息子でも學問はエライ出来るそうぢやし、年はまだ若い中々の器量人ぢや。』

『そう云へば彌助どん、才次郎さんは此ごろ鳥打の鐵砲をいぢりまわしたり、竹槍を拵へて見たりしてゐるさるが……』

『ウム。さうか。それにも何ぞ譯がありそうぢや。オ、あそこに忠エムが来た。忠エムはいつも才次郎さんの處に出はいりをしてゐるのぢやから、先つあれに尋ねて見よう。』

忠右衛門は百姓ながら一癖ありそうな面構へをした男で、ドテラの着流しでノソリノソリと二人

のそばにやつて来た。

『忠エムどん、え、所ぢや一つお前に尋ねたい事がある』と、彌助が書付を片手に握つたまゝで話しかけた。

忠右衛門は其の書付に目をつけて、更に二人の顔をジツと見やつてから斯う云ひだした。

『お前達、その書付を見たか、大鹽平八郎様の檄文ぢやぞ。大鹽様は俺達を救うてやらうといふ思召して、今度一大事を御思ひ立ちなされる。ソラ、此あひだ俺達に一朱づつ施行して下されたのも大鹽様ぢや。そしてあの時、若しや此の先き天満の方角に火事があつたら、皆々駆つけて呉れといふお頼みであつた事はお前達も覚えて居よう。』

『それを忘れてなるものかい。天満が火事と聞いたが最後、俺は忠エムどん何ん時でも駆けつける氣でゐるのぢや。』と彌助は云つた。

『彌助どんの云ふ通り、俺も火事のお手傳ひなら何ん時でも大鹽様に駆けつける』と、久作も云つ

た。

『よし／＼。それならよい。實はな、大鹽様の一大事と云ふのは、……イヤ、それはマア俺から云ふまい。今に才次郎さんが話して下さる。何にせ此あたりは大鹽様に御因縁が深い。マア腰かけてユツクリ話さう。』

忠右衛門はありあはせた石ころの上に腰かけた。彌助と久作も、狭い道を挟んで忠右衛門の向ひ側に腰をおろした。二人はもう何んにも云はないで、唯だ忠右衛門の顔ばかり覗いてゐた。それで忠右衛門は話しつづけた。

『深尾の一家が大鹽様と御懇意な事はお前達も知つての通りぢや。次兵衛さんはあの通りの人好しぢやが、弟の才次郎さんは大鹽様の立派なお弟子ぢや。それから深尾の親類で（お前達も知つてる筈ぢや）守口町に白井孝右衛門さんといふ質屋がある。其の孝右衛門さんは随分前から大鹽様のお弟子で、身代は大きいし、大鹽様のお勝手元は半分ぐらゐるあそこでお世話をしてゐるといふ事ぢや

倅の彦右衛門さんも暫く大鹽様に入塾してゐた事がある。それから般若寺村の庄屋で橋本忠兵衛さん。これは大鹽様のお妾おゆうさんの假親にまでなつてゐる。まだ忠兵衛さんの娘のおみねさんは大鹽様の御養子格之助様のお妾になつてゐる。それから同じく般若寺村の年寄に柏岡傳七さんと云ふのがある。これもお弟子ぢや。それから森小路にも柏岡源右衛門といふ年寄がある。まだ森小路には横山文哉といふお醫者もある。この文哉さんの母御は大鹽様にお針奉公してゐる。マアこんなわけで、攝津河内をまたいだ此の界限は大鹽様の御因縁で堅まつてゐると云ふてもえ、位ぢや。それぢやに依つてイザ何事と云ふ時には、皆が一度に大鹽様に駆けつける段取がチャンとついてゐる。お前達も其の積りで御加勢をして呉れよ。え、か、分つたか。それに何んぢや、此の界限ばかりぢやない。攝州、河州、泉州から播州にかけて、大鹽様のお名前を知らん者は一人もない。お名前を知らん者がなければかぢやない。大鹽様の日頃からのなされ方を有難がつて居らん者は一人もない。取りわけ渡邊の穢多村などぢやア、丸で大鹽様を神様のように思つて居るといふ事ぢや。こゝらあ

たりの穢多村でも、大鹽様のお爲なら火の中にも飛び込むと云ふのが何んほでもある。そこで大阪の御城代様よりも、兩町奉行様よりも、與力の御隠居の大鹽様の方が、よつほど御威勢が強いと云ふものぢや。』

『成程々々、そりや忠エムどんの云ふ通りぢや、所で忠エムどん此の書付は？』

『書付も書付ぢやが、忠エムどんの云ひなさつた其の大鹽様の一大事の思ひ立ちと云ふのは、一體何んぢやい？』『其の書付を読めば何も斯もチャント分る。それは檄文と云うての、一大事の御趣意を大鹽様が俺達に知らせて下さるのぢやソラ此の上書きに『天より下され候書付』とある。大鹽様は天道様の代りになつて、悪い奴等を御誅伐なさらうと云ふのぢや。それで此の書付は、天道様から下されたも同じわけぢや。』

『成程々々。所で忠エムどん、天より下され候書付』だけは俺にも讀めたが、肝腎の本文はサツバリ讀めん。お前一ツそこで讀みあけて下され。』

『そうぢや忠エムどん、大きな聲で読みあけて俺達に聞かせて下され。』
 『イヤ、そいつは俺にもチイット六かしい。これから一緒に才次郎さんの處に行かう。サア二人とも来いやい。』

三人は立ちあがった。ドテラの着流しの忠右衛門のあとから、彌助と久作は鎌をかたけてついて行つた。氏神の社の前まで来ると、其の社内に五六人の百姓が集まつて、何やらワイワイ騒いでゐた。『大鹽様』『大鹽様』といふ聲だけはハッキリと聞えてゐた。三人も社の中にはいつて行つた。社の拜殿には『天より下され』た例の『書付』が張りつけてあつた。やがて誰か『才次郎さんを呼んで来い』『才次郎さんに来て貰へ』と云ひだした。兎かくする中、社内にはモウ二十人ばかりの百姓が集つてゐた。

暫くすると月代を奇麗に剃つた、年はまだ二十五六の、凛々しい顔をした深尾才次郎が走つて來た。才次郎は行きなり拜殿に飛びあがつて、そこに張りつけた檄文を読みあけに掛つた。

『皆よく聞け、大鹽平八郎様の一大事の檄文ぢや。』

百姓共は片唾を呑んで拜殿の前に立ち並び、才次郎の顔ばかり見あけてゐた。

『四海こんきういたし候は、天祿ながくたたん。小人に國家をおさしめば災害並び至ると、昔しの聖人深く天下後、世人の君、人の臣たる者を御誠しめ置かれ候ゆる、東照神君にも鰥寡孤獨に於いて最も哀みを加ふべくば、是れ仁政の基と仰せ置かれ候。』

百姓共は其の文句が餘り分つた様子でもなかつたが、それでも一心に聞いてゐた。

『然るに茲二百四五十年太平の間に、追々上たる人、驕奢とておごりを極め、大切の政事に携はる諸役人ども、賄賂を公けに授受して贈り貰ひ致し、奥向女中の因縁を以て、道德仁義もなき拙き身分にて身を立て、重き役に經のほり、一人一家を肥し候工夫のみに知術を運らし、其の領分知行所の民百姓共へ過分の用金申付、是まで年貢諸役の甚だしきを苦しむ上へ、右の通り無體の儀を申し渡し、追々入用かざみ候ゆえ、四海の困窮と相成候に付、人々上を怨みざるものなき様に成行候へ』

ども、江戸表より諸國一同右の風儀に落入り、……(どうぢや皆な分るか。善く聞けよ。)

『天子は足利家已來、別して御隠居御同様、賞罰の柄を失ひ候に付、下民の怨み何方へ告惣とて告げ訴ふる方なきやう亂れ候に付、人々の怨氣天に通じ、年々地震火災、山も崩れ水も溢るゝより外、色々様々の天災流行、終に五穀飢饉に相成候……(どうぢや、此の通りであらうがな。善く聞けよ。)

『是れ皆な天より深く御誠しめの有がたき御告に候へども、一向上たる人々も心つかず、猶ほ小人奸者の輩、大切の政を執り行ひ、只だ下を悩まし金米を取り立てる手段ばかりに打懸り、實以て小前百姓共の難儀を、吾等如きもの草の蔭より常に察し悲しみ候へども、湯王武王の勢位なく、孔子孟子の道徳もなければ、徒らに蟄居いたし候處、此節米價彌々高直に相成、大阪の奉行並びに諸役人ども、萬物一體の仁を忘れ、得手勝手の政道を致し、江戸へ廻米を致し、天子御在所の京都へは廻米の世話も致さざるのみならず、五升一斗の米を買ひに下り候もの共を召捕など致し……(此事は

お前達もよく知つてゐる筈ぢや。江戸へは内々で廻米をする癖に、大阪の米を安くせねばならぬと云うて、京都其外へは米を廻はさず、近在の人達が困りぬいた揚句、僅か五升一斗の米を買ひに大阪に下れば、それを召捕つてひどい目に會はせる。それが今の役人の仕打ちぢや。それから……)

『實に昔し葛伯といふ大名、其の農人の辨當を持運び候小兒を殺し候も同様、言語道斷、何れの土地にても人民は徳川家支配のものに相違なき處、此くの如く隔てをつけ候は全く奉行等の不仁にて其上勝手我儘の觸書等を急に差出し大阪市中の遊民ばかりを大切に心得候は、前にも申す通り道徳仁義を有せざる拙き身故にて、甚だ以て厚かましく不届の至……(大阪の町人ばかり可愛がつて、米を作る百姓をいぢめる、それで俺達の浮かむ瀬があるか。それから此次が大切な文句ぢやぞ。)

『且つ三都の内、大阪の金持共、年來諸大名へ貸しつけ候利徳の金銀並びに扶持米等を莫大に掠め取り、未曾有の有福に暮し、町人の身を以て大名の家老用人格等に取用ゐられ、又は自己の田畑新田等を夥だしく所持、何不足なく暮し、此節の天災天罰を見ながら畏れも致さず、餓死の貧人乞食

をも敢て救はず、其身は膏粱の味とて結構の物を食ひ、妾宅等へ入り込み、或は揚屋茶屋へ大名の家來を誘ひ参り、高價の酒を湯水を飲むも同様に致し、此の難澁の時節に絹服をまとひ候河原者を妓女と共に迎へ、平生同様に遊樂に耽り候は何等の事か、紂王長夜の酒宴も同じ事、然るにその奉行諸役人、手に握り居り候政を以て右の者共を取り締め、下民を救ひ候儀も出来難く、日々堂嶋相場ばかりをいぢり事いたし、實に祿盜にて、決して天道聖人の御心に叶ひ難く、御報しなき事に候……(どうぢや皆の者、役人と金持は全く此の通りであらうがな。)

群集はもう三四十人にもなつてゐたが、皆な目を光からして聲の好い才次郎の辯舌に聞きふけてゐた。

(サア、これからいよく大鹽様の一大事のお話しぢや。『蟄居の我等、最早や堪忍成り難く、湯武の勢、孔孟の徳はなけれども、據んどころなく天下の爲と存じ、血族の禍をおかし、此度有志の者と申合せ、下民を惱まし苦しめ候、諸役人を先づ誅伐いたし、引續き驕に長じ居り候大阪市中の

金持の町人共を誅戮に及び申すべく候間、右の者共穴藏に貯へ置き候金銀錢等、諸藏屋敷に隠し置き候俵米、それぞれ分散配當いたし遣はし候間、攝河泉播の内、田畑所持致さる者、たとへ所持致し候とも、父母妻子家内の養ひ方出来難き程の難澁者へは、右金米等取らせ遣はし候間、いつにても大阪市中に騒動起り候と聞傳へ候はば、里數を厭はず一刻も早く大阪へ向け駈参るべく候、而々へ右米金を分け遣はし申すべく候……(どうぢや皆の者、其の米金が欲しうはないか。欲しかつたら大鹽様の仰しやる通り、イザといふ時は、里數を厭はず一刻も早く駈けつける事ぢや。』
群集の目の色は愈々益々光つて來た。才次郎の目からも火の子が飛びだしてゐるやうに見えてゐた。

(それからまだまだ大事な事があるぞ。『鉅橋鹿産の金粟を下民に與へられ候遺意にて、當時の饑饉難儀を相救ひ遣はし、若し又其内、器量才力等のある者には、夫々取り立て、無道の者共を征伐いたし候軍役にも遣ひ申すべく候、必ず一揆蜂起の企てとは違ひ、追々年貢諸役に至るまで軽く致

し、總て中興神武帝御政道の通り寛仁大度の取扱に致し遣はし、年來驕奢淫逸の風俗を一洗相改め質素に立戻り、四海萬民いづれも天恩を有難く存じ、父母妻子を養はれ、生前の地獄を救ひ死後の極樂成佛を眼前見せ遣はし、堯舜天照皇太神の時代に復しがたくとも、中興の氣象恢復とて立戻り申すべく候……(皆の者こゝを善く聞いたか。お前達は今ま現在、生地獄に落ちてゐるのぢや。それを大鹽様が救ひあけて極樂成佛を此世で目の前に見せて遣はすと仰しやる。お前達は地獄が好か。極樂が好なら大鹽様の仰せ通りにする事ぢや。)

(それから)『此の書付、村々へ一々知らせたく候へども、數多の事に付、最寄の人家多く候大村の神殿へ張りつけ置き候間、大阪より廻し之ある番人共に知られざる様に心懸け、早々村々へ相觸れ申すべく候、萬一番人とも見付け、大阪四ヶ所の奸人共へ注進いたし候様子に候はゞ、遠慮なく面々に申合せ、番人を残らず打殺し申すべく候、若し大騒動起り候を承りながら疑惑いたし、馳け参じ申さず、又は遅参に及び候はゞ、金持の米金は皆な火中の灰に相成り、天下の寶を取失ひ申すべ

く候間、跡にて必ず我等を恨み寶を捨てる無道者と陰言を致さる様いたすべく候、其爲一同觸れ知らせ候……(よいか、皆な分つたか。)

(それからまだある。)'尤も、是まで地頭村方にある年貢等にかゝり候諸記録帳面類は總て引破り燒棄て申すべく候、是れ往々深き慮りある事にて、人民を困窮いたさせ申さる積りに候、去ながら此度の一舉、本朝平將門、明智光秀、漢土の劉裕、朱全忠の謀叛に類し候と申す者も、是非之ある道理に候へども、我等一同心中に天下國家を篡奪いたし候存念より起りし事には更に之なく、日月星辰の神鑑にある事にて、詰る處は、湯武、漢の高祖、明の太祖、民を吊ひ、君を誅し、天討を執り行ひ候誠心のみにて、若し疑はしく覺え候はゞ、我等の所業終り候處を爾等眼を開いて看よ。(檄文の文言は之でお仕舞ぢや。サア皆の者、お前達はどうする氣か。大鹽様のお味方になるか。それとも今迄どほり大阪の役人と金持とにいちめぬかれて、馬鹿にされて、それで泣寝入をするか、どちらなりと銘々の勝手にせよ。)

才次郎は斯う云ひはなして、まだ拜殿に突立つまゝ、群集の顔を睨めまはしてゐた。群集も矢張り緊張した沈黙を守つて才次郎の顔ばかり見つめてゐた。

『オ、あの空を見い。火事ぢや！ 火事ぢや！』と叫ぶ者があつた。群集の顔も才次郎の顔も一齊に西の空に向いた。西の空はバアツト一面に赤くなつてゐた。

『大阪ぢや、大阪ぢや！』天満の火事ぢや！ 天満の火事ぢや！』といふ聲々が群集の間に起つた。『鎮まれ、鎮まれ！』と才次郎は拜殿の上から叫んだ。其の目は大阪の火事が燃え移つたように赤くなつて光つてゐた。

『あの火は確かに天満ぢや、大鹽様が俺達に早速駆けつけて来いといふ合圖のノロシぢや。サアこれから尊延寺に行つて早鐘をつくのぢや。皆の者は銘々に用意をして、一人でも餘計に味方を誘つて来い。鐵砲があるなら鐵砲を持つて来い。刀がなるなら刀を持つて来い。ナタでも鎌でも庖刀でもよい。刃物が無ければ竹槍を持つて来い。同勢が揃つたら般若寺村の方に押しかけて、あそこの

味方と一緒になつて、それから守口、森小路と順々に進んで行かう。あれ、あれ、火の手は段々強くなる。グズグズしてゐて折角の金と米とを取り損ふな。サア皆の者、早く！ 早く！』

それから程なく尊延寺の早鐘が近隣に鳴り響いた。晝過になると、竹槍を持ち、鎌を持ち、鐵砲を持つた何百人かの百姓が、白鉢巻をした深尾才次郎に引率されて、攝州般若寺村の方角へ繰り出した。忠右衛門も彌助も久作も、皆な其中に交つてゐた。大阪の空には火の手が益々盛んに起つてゐた。百姓達の目の中にはモウ大阪市中の町々の道ばたに散らばつてゐる筈の仰山な金や米がアリアリと映つてゐた。

三 町人公方と小竹先生

同じ日の朝、大阪北船場今橋筋、鴻池善右衛門方の奥の間に、當時儒者として有名な篠崎小竹先生と、これも有名な書林河内屋の亭主喜兵衛とが對坐してゐた。

北船場は大阪の金穴と云はれた位で、今橋筋には鴻池善右衛門、鴻池庄兵衛、鴻池善五郎などといふ鴻池屋の一黨、それに次いで、天王寺屋五兵衛、平野屋五兵衛などあり、又高麗橋筋には三井呉服店、岩城、升屋などがあり、富商家軒を並べ、其の繁昌を競つてゐた處である。中にも鴻池の總本家善右衛門の邸と云へば大したもの、昔し淀屋辰五郎が自分で云つたといふ言葉の通り、正に『町人公方の御所』であつた。

篠崎小竹は本名を長左衛門と云ひ、博學能文、浪華第一の儒者であつたが、此人、儒者に似合はず蓄財が上手で『儒中の鴻池』といふ紳名さへ付けられてゐた。家作なども大ぶん持つてゐて、其の方の資格では家主長左衛門と呼ばれてゐる。さういふ人物だから、只だ物識りで器用に文章を書き字も上手だと云ふだけのもの、學者らしい見識もなければ誠意もなかつた。それで鴻池家に對しては先づ御出入りの格で、今日は主人善右衛門に論語の御講釋を申上げる筈で、早朝から此の入室に詰めて、主人の出座を待つてゐるのであつた。

喜兵衛は河内屋一黨の本家で、これも書林として鴻池の御出入りであり、今日も何やらの御買上を願ふ筈で參上してゐるが、丁度篠崎先生がお見えになつてゐると云ふので、待ち合せの間、暫く先生の御機嫌を伺つてゐるのであつた。

二人は名香の香りのする殿様火鉢を隔てて浮世話に耽つてゐるが、いつしか話は大鹽平八郎が先達て藏書一切を賣拂つて施行をした事に及んで來た。

『あれは手前共の一黨でお引受を致したので御座いますが、多年お買ひ集めの事で御座いまするので、それはそれは随分な本數で御座いました。何んでも一萬二千三百四十五冊で金高が六百五十四兩ばかりで御座いました。』

『ボホウ、随分珍書もあつたかの。』

『へい、それはもう誠に結構な物ばかりで、一切經まで揃うて居ました。』

『ホウ一切經まで、いづれ門人共を絞つて買ひ集めた物であらうな。』

「左様で御座います。兵庫西出町の柴屋長太夫と申す方などは、天保三年に入門なされてから五年の間に書籍代を三百兩も差出したと聞いて居ります。」

「多分それは、貴様の書籍を買ひ調へてやる、但し其の書籍は當塾に預つておくと云ふ筆法であらうな。」

「先づ左様な事ででも御座いませうか。エツヘヘ。」

「それで施行は高言どほりに致したかの。」

「へい、それはもう、矢張り私共一黨で御世話を致しましたが、安堂寺町五丁目の本屋會所で、此月の初から七日の間、一萬人に金一朱づつキツチリと渡し濟みになりました。其の金高が六百廿兩餘になりまするが、大鹽様のお邸では其後もまだ引續いてお恵みになつて居ると申す事で御座います。そして豫め施行札をお配りになつた時、これを其方共に遣はす代り、若し天満方角に火事でもあつたら必ず馳けつけてくれよと、一々御申渡しになつたとか聞いて居ります。」

「ツレ、あの男はそういふ事を申す。總てが名聞の爲ぢやの。施行は誠に慈善に相違ないが、名聞の爲に施行をするとは怪しからん。それに儒者が藏書を手放すとは、武士が兩刀を棄てるようなものぢや。料見の程が分らん。」

「左様で御座います。どういふお思召しであ、いふ事をなされましたか。尤も、あの通り疝の強い御氣性で居られますから……」

「サア其の疝の強い氣性と申す事ぢやがの。つまりあの男は慢心の狂人ぢやな。」

「折々左様なお噂も承たまはりますが、然しそれに致しまして……」

「イヤ全く狂人に相違ないよ。あの目の釣りあがつた人相を一目見ても分るぢやないか。」

「でも中々立派な骨柄をして居座になります。色はお白いし、脊はお高いし、瘦せぎすでは御座いますが、あの面長の凛としたお顔で、唇をシツカリ結んで睨めつけられますと、手前共はもうビリビリ致します。」

『それはお前達があつた男の慢心に威かされてゐるからぢや。心ある者は皆あれを狂人扱ひに致して居る。前東奉行の高井山城守殿があれに膳部を賜はつた時、あれが金がしらと申す魚を頭から尻尾まで骨も残さず食ひ終つたといふのは有名な話ぢや。』

『それも承たまはつて居りますが、氣象の強い學者先生は違つたものぢやなどと、下々では感心して居る者も御座います。』

『馬鹿な事を云ふものでない。一體あれの學問が食はせ物ぢや。陽明學を賣り物にして、良知の一本槍で通して居るが、一體あの男は、何んでもかでも自分の思ひついた事を皆な良知ぢやと自惚れてゐる。良知どころか一己の我意ぢや。然しそこが即ちあの男の慢心ぢや。慢心がこうじると亂心になるわい。どこやらの金持が茶道に耽つて、段々高價な茶器を買ひ求めて、とう／＼名物の茶碗一つを抱いて其家を亡ぼしたといふ話があるが、大鹽も先づ其の格ぢやの。』

『成る程、そういふ處も御座います。手前共には學問の事は勿論分り様も御座いませぬが、

大鹽様の行先は何んぢややら危ぶないような氣が致します。』

『今に何かで身を亡ぼすまでの事よ。あんな者を學者々々と云はれては我々が迷惑する。なア喜兵衛、そうぢやないか。それに大鹽は先達て當家にも大枚な無心を申込んだと云ふではないか。』

『左様に承たまはつて居ります。何んでも此ごろの米價高直につき、下々の難澁を救ふのぢやと仰せられて、鴻の池一黨、米屋一黨、天王寺屋、加島屋、其外大身代の諸家へ大金の御無心があつた。それで御座います。それで當家あたりでも何んとなく世上不穩な時節柄でもあり、又外ならぬ大鹽様の御相談でもあり、大抵の所まで、御承知になるお積りで、然し大金の事で御座いますので、一應奉行所に其旨を伺ひました所、誰に何程の金を貸さうと、それは銘々の勝手であるが、然し與力の隠居にそれ程の義理立をする位なら、此後江戸から御用金の御沙汰のあつた節、一言半句も言はせぬぞよと、奉行様からト、メを刺されたので、いづれも驚いて大鹽様にお斷りを申したとやら承たはつて居ります。』

『ウム成程、山城守の云はれる所に道理があるわい。假令如何様に米價が高値であらうとも、又下々が如何様に難澁しようとも、與力の隠居が差出がましい事を申すべき筋合でない。當家あたりでも、大鹽などに對して私に大金を貸さうより、快よく公儀の御用金を差出した方が何ほど立派であるか知れぬ。大鹽も一つ慢心の鼻を挫かれたと云ふものぢやな。』

『それにまだ斯ういふ事も承たまはつて居ります。大鹽様は當家あたりへ右の御相談の以前、大身代の家々から身代百貫目につき、一貫目づつの割合で出金いたさせ、それで以て下々の難澁を救はうと申す仕様書をお作りになりました、それを當主の格之助様から東奉行所へ御差出しになりました所、山城守様は御採用の景色も見えず、其後再三格之助様から、強いて御申立が御座いましたのに對して、山城守様はとうく、「平八郎亂心いたしたか」とお叱りが御座いましたので、格之助様は返す言葉もなく、其ま、退出して御養父様に其由を語られました所、平八郎様は落涙に及ばれまして、此上は致方ありと仰せられたと申す事で御座います。』

『喜兵衛、其方はよく色々と委しい事を存じてゐるな。ハハハ。何んほ大鹽が「此上は致方あり」と申した所で、高が與力の隠居でどういふ致方があるものか。一體大鹽には門人が多い、一味が多いと申すが、東組の與力同心の中で大鹽についてゐる者がどの位あるかの。』

『サア、それは如何様か存じませぬが、東組と西組との間は御存じの通りモウ永いことスレ／＼で御座いまして、それに今度、東奉行の跡部山城守が却つて西組方をお近づけになり、殊に西組の内山喜三郎様をきつく御信任の御様子で、遠からず、兩組の組替もあらうと申す事で御座います。所が、大鹽様は内山様と大のお仲悪で、そこで東組の與力同心の方々が大抵皆な大鹽様をお頼りにして、西組を憎むといふ有様かと存じて居ります。』

『ウム、そういふ事を自分も聞かんではない。然し喜兵衛、大鹽がどれほど東組に人望があるにした所で、又どれほど名聞の施行などをやつたにした所で、又昔しからの評判がどれほど高いにした所で、又よしんばあれの學問がどれほど深いにした所で、又よしんばあれの氣象がどれほど強いに

した所で、高が二百石ばかりの奥力の隠居で「此上は致方あり」などと高言をほざいて見ても、どう致方があるものぢやあるまいテなア。」

『イヤ、全くそれは御尤もで御座います。ぢやに依つて手前共は、及ばすながら、いかう大鹽様のお身の上を御案じ申して居るので御座いますが……』

斯ういふ話かはすんでゐる所に、當家の主人善右衛門がいよいよ出座に成るといふ知らせがあつて、やがて次の廣座敷との隔ての襖がスウツト兩方に開かれた。

正面には三枚重ねの紫緞子の蒲團の上に、丸で殿様か公方様かのような善右衛門が、脇息に打もたれて鷹揚に坐つてゐた。河内屋喜兵衛は忽ち頭を疊の上に擦りつけて平伏した。篠崎小竹先生はまさか、喜兵衛ほど頭を擦りつけはしなかつたが、それでも恭々しく一禮に及んで、殆んど膝行するといふ形で御前に罷り出で、さすがに威儀を繕つて備への見臺の前に坐つた。

『小竹先生、今日は御苦勞に存じまする』といふ御鄭重なお聲掛りがあつた。小竹先生は更に又恭

々しく一禮に及んだ。町人公方は先程から顎一つ動かしてもなされなかつた。

其とき忽ち『大變で御座ります。大變で御座ります。』と、注進の者がバタバタ駆けこんで来た。

『何事ぢや、騒々しい。』善右衛門殿は鷹揚に問ひかけられた。

『何事どころでは御座りませぬ。先程から天満方角に火の手が見えまして、何やら筒音らしいものが聞えて居りましたが、早速取調べ聞合せました所、大鹽平八郎様の一味が謀叛を起され、程なくこれへ押寄せて参ると申す事で御座りまする。』

サアもう論語の御講釋どころではない。『それは大變！』それは怪しからん！』と云ふので、小竹先生も河内屋喜兵衛も、あわてふためき這々の體で逃げだしてしまつた。善右衛門殿も同じくあはてふくめくお附の人々に促がされて、さすがは矢張り悠々と奥の間深く引下がられた。

四 大砲、火矢、砲録玉の一日

東町奉行跡部山城守は二月十七日の夜、町目付平山助次郎から大鹽平八郎が謀叛を企てゝゐるといふ密訴を受けた。平山は東組の同心で、矢張の大鹽の門人であり、一擧の連判にも加はつてゐたが、段々恐ろしくなつて反り忠を試みたわけである。

平山の密訴に依れば、来る十九日、新任の西町奉行堀伊賀守が同役山城守と共に天満を巡見し、中の刻（午後四時）頃與力朝岡助之丞の邸へ立寄り、そこで休息する豫定になつてゐたのだが、其の朝岡の邸は丁度大鹽の邸の直ぐ向側にあるので、大鹽は其の機を外さず朝岡邸に押し寄せ、兩町奉行を大砲で討ち止め、續いて市中に火を放ち、富豪等の倉廩を開いて窮民に施す計畫だと云ふのであつた。

然るに山城守はまだ半信半疑でもあり、容易に手を下して却つてそれが爲に爆發の口實を與へてもならぬと云ふので、兎にかく一方には平山を急に江戸に遣はして此の由を幕府に訴へしめ、一方には十九日の巡見を延引した。

所が、十九日の早朝、吉見九郎右衛門の倅英太郎と、河合郷左衛門の倅八十次郎とが、九郎右衛門自筆の訴狀と、版行摺の檄文とを携へて、堀伊賀守の役宅に駈け込んで來た。吉見も河合も東組の同心で、山城守に對しては不平があり、兼て大鹽に與して倅共を入門させてゐたのだが、扱ひよく擧兵となつて見ると、これも平山同様、恐ろしくなつて來たので、窺かに倅共をして裏切をさせたのであつた。但し東奉行所には大鹽一味の與力、瀬田濟之助、小泉淵次郎などが當番をして居る筈なので、それで支配違ひの西奉行所に訴へ出たのであつた。

伊賀守は此の訴へに接して、平八郎の謀叛、最早や疑ふ餘地がないと云ふので、早速その旨を山城守に通知し、西組の與力同心を招集して討取の準備に掛つた。

山城守は其の報告に接して、直ちに當番宿直の瀬田、小泉兩名を御用談の間へ呼寄せた。所が小泉はそれと感づいて逃げ出さうとする所を一刀に斬り伏せられ、瀬田はその隙を見て奉行所の扉を乗り越え、はだしのまゝ、天満橋を一目散に大鹽邸へと逃げ歸つた。

それから東奉行所では、跡部山城守が一策を案出し、平八部の叔父に當る東組與力大西與五郎に對し、其方平八郎へ參り彼に切腹を申付け、不承知とあらば刺違へて死ねと申渡したが、大西はいつまで立つても戻つて來なかつた。それは其筈、大西はグズグズする中、太鹽邸に火が起つたので親子で西の宮まで逃亡したが、更に後悔して大阪に引返す中、見咎められては大變だと、刀を海の中に投げこんだといふ始末であつた。

扱、東奉行に於いては、西奉行所堀伊賀守もやつて來る、兩奉行其外、甲冑着用の姿は嚴めしかつたが、天滿には既に火の手が盛んに擧つて、大鹽の邸も朝岡の邸も焼けたらしく、大砲の響や砲礫玉の音が頻りと聞えて來るのに、こちらは何れも大狼狽の有様で、大鹽討取の手順など少しも立たなかつた。何しろ兩奉行配下の與力同心では手不足だと云ふので、鐵砲奉行の同心四十名の助力を求め、更に定番遠藤但馬守へ加勢を申入れ、但馬守の命に依つて、玉造、京橋の兩番から數十名宛の援兵がやつて來た。大將山城守は具足を着用して、冑を高紐に掛け、床几に依つて控へてゐた

所はよかつたが、玉造の與力坂本鐵之助等が山筒を持つてやつて來た時、是非々々大筒を御持參を願ひたいと云ひだし、此の市街戦に大筒は無用だと専門家が抗議をしても、何が何んでも大筒が無くては心細いと見え、是非々々大筒をと催促するので、坂本等はよんどころなく態々無用の百目筒を取りにやつたと云ふウロタへ方であつた。

然らば大阪城中は如何にと云ふに、城代土井大炊頭が兩町奉行等に暴徒の鎮定を命じ、自ら兩番頭を嚮導として本丸の巡視をしたと云へば、相當嚴重らしくも聞えるが、大番組の面々が擔いで來た鎧櫃の中から、鍋釜類が出て來たといふ滑稽な次第であつた。

其の間に只一つ山城守の取つた戦略は天神橋の南の端の橋板を取りはづした事であつた。其の戦略の巧拙は別問題だが、兎にかく賊はそれが爲に、天滿から天神橋を渡つて直ちに東町奉行所へ攻め寄せる事が出來なかつた。従つて賊は止むなく大川傳ひに西に下り、浪花橋を渡りに掛つた。山城守は同じく此の橋をも切り落す作戦で、既に人足共は橋板の取崩しに掛つてゐるが、只だ一喝で

追拂はれてしまつた。

扱、大鹽勢の出で立ちを見てあれば、大將平八郎及び副將格之助は差込野袴にて白木綿の鉢巻を締め、瀬田濟之助、大井辰一郎、渡邊良左衛門、近藤梶五郎、庄司義左衛門、若黨曾我岩藏、守口町孝右衛門、般若寺村忠兵衛、源左衛門傳七、其他の者共は何れも差込を差し、刀を帯び、一同、槍、長刀、鐵砲の類を携へ、五七の桐の紋所、下に二ツ引の印ある旗一旒、天照皇太神宮湯武兩聖王、並びに東照大權現と認めたる旗二旒、救民と大書したる四半一本を押し立て、大筒四挺を車臺に載せ、後陣に在つては數多の人夫に長持葛籠の類を荷はせ、往く往く市民の屈強なる者を味方に附け、總勢數百人、殺氣天を貫くといふ勢であつた。

それから彼等は浪花橋を渡り、左に折れて二手に分れ、今橋筋と高麗橋筋とを東に向ひ、兼て目ざした此の富豪町に片端から砲礮玉を投げ込み、或は火具鐵砲を打ち込み、散々に焼き立てた。家財も道具も米も金も千兩箱も皆な一緒くたになつて、そこら一パイにころがつてゐた。附き従つた

何百人の群集は寶の山に入つた思ひで、我先きにと掠奪を恣いませにした。鴻池庄右衛門方では四萬兩も取られたといふ話が残つてゐる。千兩箱一個でも四貫目の重さがあると云ふから、それを擔いで逃げた仕合せ者も、随分骨が折れた事だらう。時刻は其時もう晝過であつた。

然るに東奉行所では、賊にあの通りの狼籍を働かせて、ジツト見てゐるのでは餘り腑甲斐ないと云ふので、皆々山城守に出馬を迫つたが、山城守は臆し切つて、中々出馬しようとは云はない。そこで或者が機轉をきかせて、『最早や川崎の東照宮が危く見えます。若しあの御社の焼失を御見物になつては、憚りながら御家にも係はりませう』と言上したので、山城守もギョツトした様子で漸く氣を取直し、然らば出馬致さうと云ふ事になつた。

所が、御奉行の御出馬には、御馬印を眞先に押立てねばならぬと云ふ事になつたが、誰も眞先に御馬印を持たうと云ふ者がない。仕方がないので、折ふし詰め合せてゐた穢多共に大小を帯びさせ、それ、纏ひを持たせる事にした。穢多共は何しろ大小を差させられた嬉しさに、怖い事も打忘れて

眞先に進んで行つた。

之より先、堀伊賀守も城代大炊頭殿から出馬の命令があつたと云ふので、京橋口の與力同心數十人を従へて出馬したが、島町筋を西に御稜筋の邊まで來ると、丁度大鹽勢が高麗橋を渡りかけてゐた所で白い旗がチラリホラリと見えてゐた。御稜筋から高麗橋までは四町ばかりもあるので、小筒の玉などは逆も届く筈はないのだが、伊賀守は何と思つたか、『ソレ打てッ!』と命令した。一同は滅茶々に發砲した。命令した者も打つた者だ、打つた者も打つた者だと、今に笑ひ話に残つてゐる。後の調べに依ると、大鹽勢では其時丸で打たれた事を知らなかつたらしい。いよいよ以て阿呆らしくなる。然しそれは先づ好いとして、其のケタたましい筒音で伊賀守の馬があげられたし、折角の大將が見事に落馬した。それもまだ好かつたが、一同の者共は、ソレ大將が打たれたと云ふので皆バラバラ逃げ散つてしまつた。取残された伊賀守は致し方なく、獨りで起きあがつて塵を拂ひ、御稜町の會所にたどりついて休息したといふ話。

山城守は其あとへ繰出し、内平野町で太鹽勢と少しばかり砲火を交へ、堺筋に至つて稍や烈しい砲戦を爲し、そこで坂東鐵之助が敵の大砲方浪人櫻田源左衛門を打ち止め、其の首を切取つて槍の先に貫き、大ぶん景氣よく進んで行つたが、四つ辻まで行つて見ると、其時にはモウ大鹽勢は潰亂して名も知れぬ者の屍體が一つ轉がつて居り、外は大筒、小筒、槍、太鼓、旗の類が打棄て、あつた。……

先づこんな事で大鹽騷動は鎮靜した。然し兵火は八方に擴がり、翌日の夜まで焼けつづけた。先づ大阪市中の四分の一は焼けてしまつた。そして大手前の野原に焼け出されの男女老若が群集して盟の中で子を産んでゐる産婦もあり、莖の上に轉がつて泣いてゐる瘡瘡患者もあり、其の苦悶呻吟が丸で関の聲のように遠方まで聞えてゐた。

サアそれから罹災者の收容所が出来る、お救ひ米が出る、廉賣米が出る、出しおくれの富豪の義捐がある、米價が更に上る、疫病が流行する。随分の混雜であつた。然し其中、暴徒の多くもそれ

それ逮捕となり、或は自殺し、久しく行方が知れずに不安の種となつてゐた大鹽父子も、三月二十七日、油掛町手拭地仕入職美吉屋吉五郎方に潜伏してゐるのを發見され、そこで自ら焚死して落着した。そして大鹽父子其他十五名の者は鹽詰の死骸三郷引廻しの上ハリツケとなり、其他關係者もそれごとく獄門、死罪、遠島、追放等に處せられた。

之に對しお役人側に於いては、先づ城代土井大炊頭が『萬端の差圖宜しきを得たり』といふので美濃兼定の御刀を賜はり、定番遠藤但馬守が『平生の心掛宜敷儀なり』とあつて御鞍鐙を賜はり、其外、坂本鐵之助が『拔群の功』に依つて御目見に昇進し、別に銀百枚を賜はりたるを初めとし、それぐの御賞與があつた。跡部山城守と堀伊賀守とは、さすがに何等の御褒美にも預らなかつた。ついで平山、吉見兩人は反り忠の功に依つて御譜代席小普請入となり、英太郎八十次郎は各銀五十枚を頂戴した。

音に名高い大鹽騷動は斯くの通り、只つた一日間の騷ぎに過ぎなかつた。そして天下は再び太平

に歸した。

五 易者にも分らん事

平八郎父子其他の鹽詰屍體が飛田でハリツケになつた九月十八日の夜が更けてから、新町橋の西詰にある。通稱『白髯』といふ江戸兒の易者の家で、近處の若い者が二三人寄つてヒソヒソで話してゐた。

『大鹽様もとうとうハリツケになつたと云ふやないか。』

『ハリツケになつたオシチキ人を大鹽様なんと云ふ奴があるかい。』

『コレお前達ヤ、此あひだから御觸れのあつたの知らねえか。』世上の取沙汰、善惡に依らず申聞敷候』と云ふんだぜ。』

白髯は皮肉な笑ひ顔をして若い者等を制した。

「そないなこと云うたら何も話は出きやせんがな。」

「出けんもんなら、せんと置いたらえゝがな。」

「そやかて、人間が顔を見合せて黙つてばかり居られへんがな。」

「馬鹿だのう、お前達や。あのお觸は、善惡に依らず大鹽様の噂をするなと云ふ事だよ。まさかそ
うも云はれねえから、世上の取沙汰と、斯う來たんだ。」

「白髯はん、わたいソウ云はれると猶のこと大鹽様の事が話しとなる。」

「全くそう云ふもんだ。話しかつたら話すさ。まさかハリツケにするとも云やしめい。」

「それぢや先生、大鹽様は何んであんな事しやはつたんやろなア。」

「ナゼと云つて人間には、疔癩といふ者があるわな。」

「それぢや、大鹽様は疔癩を起しやはつたんやな。」

「そいぢや、あの砲碌玉ちうなア、疔癩玉の事やな。」

「マアそんなんなものよ。だけど何んだぜ、疔癩にも大きいのと小さいのとがあるからの。」

「大鹽様やよつて大疔癩や。」

「そうよ。人間疔癩を起す程なら何んでも大きな疔癩を起す事だ。」

「白髯はん、そやかて大鹽様あんな事しやはつて、ハリツケになつたりして、自分の損やないか。」

「短氣は損氣と云ふからのう。だけど何んだぜ、あれがお互ひ貧乏人共の爲にや行々得になるかも
知れねえ。」

「わたいなア先生、斯う云ふこと聞きました。大鹽様は江戸の徳川様をつぶして天下を取る積りや
つたんやと。」

「ウム、世間の人はそんな事を云ふがの、俺はそう思はねえ。そりやア、お奉行様に對して腹いせ
をする氣もあつたらうさ。あわよくば大阪城を乗取る位の胸算もあつたらうさ。だけど、若しか大
鹽様が徳川様をつぶさうと云ふんなら、薩州なり長州なり西國の大名達と示し合せて、何とか外に

遣り方があつた筈だアね。現にお役人衆の方ぢや、大鹽様の蔭に薩州が隠れてるだらうなんて大ぶ
ん氣にしてゐたと云ふ事だ。だけど大鹽様にや、そんなケもなかつた。それで大鹽様は只、貧乏人
の溜飲を自分の溜飲にしたんさ。貧乏人の疳癩を自分の疳癩にしたんさ。大阪の市中は金持様の御
支配だからの。」

「それぢや大阪は徳川様の御支配ぢやないのんか。」

「徳川様の御支配には相違ねえが、金持様の御支配の方が力が強いや。よしんば徳川様の天下が潰
れたつて鴻池様の天下でも新らしく出来て来りやア、貧乏人のウダツのあがる時はありやしねえ。」

「先生、易の本にそないな事が書いておまんのか。」

「易の本にや書いてないがの、俺の目の玉の中にチャアンと書いてある。大鹽様の目の玉の中にも
矢張りそれが書いてあつたんだよ。」

「それぢや白髯さんも、いつか又謀叛を起しやはるのんか。」

「馬鹿を云ふな。俺がよくな者に謀叛のム字も起せるかい。だけど、越後の柏崎にや先達て一揆
があつた。攝州の能勢にもあつた。皆んな大鹽様の跡繼だ。」

「そいぢや先生、これからまだ疳癩玉を投げる人が仰山に出て来やはるのやろか。」

「サア、それは俺にも分らねえ。」

「それぢや徳川様の天下はいつまで續くのやろ。」

「それも俺にも分らねえ。」

「それぢや鴻池様の天下はいつ出来るのやろ。」

「それも分らねえ。」

「それぢや大鹽様の跡繼の天下はいつ出来るのやろ。」

「それも分らねえ。」

「易者にも分らん事があるのかなア。」

「コラ、お前達ヤ忘れたか。世上の取沙汰、善惡に依らず申す間敷事！」
 白髯の先生は又皮肉な笑ひ顔で若い者等を睨みつけた。若い者等は一度にドット吹きだして笑つた。……

桃太郎

——金持鬼を征伐した話——

(一)

昔し昔し、或る處に貧乏なお爺さんとお婆さんが居りました。毎日お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。お爺さんとお婆さんは毎日そうして善く働きましたけれど、いつまで過つても貧乏でありました。

それと云ふのは、ツイ近處の鬼が嶽といふ高い山に、恐ろしい鬼の群が住んで居りまして、お爺さんが柴刈りに行きますと、

『コラ爺い。此の山は俺の山だ。俺の山の柴を刈るなら貢ぎ物を出せ。』

と、斯う云ひます。又お婆さんが洗濯に行きますと、

『コラ婆あ。此川は俺の川だ。俺の川で洗濯をするなら貢ぎ物を出せ。』

と斯う云ひます。それでお爺さんとお婆さんは、幾らせつせと働いても、働きためた物は大概嘗んな鬼に取られて、いつまで立つても貧乏でありました。

或る日のこと、お婆さんが川で洗濯をして居りますと、川上の方から大きな桃が一つ、ドンブリコ、ドンブリコと流れて來ました。お婆さんは手を叩きながら、

『あつちの水は辛アらいぞ、こつちの水は甘アまいぞ、

あつちの水は鬼の水、こつちの水は人の水。』

と歌ひました。すると、桃は段々お婆さんの方へ寄つて來て、お婆さんの前で止まりました。お婆さんは嬉しがつて、直ぐにそれを拾ひ上げました。

『マア何といふ立派な桃だらう。内に持つて歸つてお爺さんと二人で分けて食べよう。』

斯う云つてお婆さんは其の桃を洗濯の着物と一緒に鹽の中に入れて、そして鹽をかかえて内へ歸りました。

暫くするとお爺さんは柴を脊負つて山から歸つて來ました。

『お婆さん今歸つた。』

『お、お爺さん御歸りなさい。今日は鬼も來ませんでしたか。それはマア好かつた。早く上へおあがりなさい。好いものをあけます。』

お爺さんが鞋をぬいで上にあがりますと、お婆さんは戸棚の中から桃をかかえて來ました。お爺さんはそれを一目見て驚きました。

「マア、何んと云ふ見事な桃だらう。どこでこんな物を貰つて来たの？」

「今日、川で拾つて来ました。』

「ナニ川で？。それは不思議だ。』

お爺さんは大喜びで桃を手に取り上げようとしますと、其時、桃はボンと二つに破れて、中から可愛らしい男の赤ん坊が、両手を擴けながら飛びだしました。お爺さんも、お婆さんもビックリしました。けれども二人は、ズット前から子供が一人、欲しい欲しいと思つてゐた所でしたから、これは丁度好いと大喜びで、

「マア何んといふ可愛らしい子でせう。』

「ほんとに何んといふ強そな子だらう。』

「これを内の子にして育て、やりませう。』

「それが好い。此の子はキツトえらい者になるだらう。』

と、お爺さんお婆さんは顔を見合せてニコニコ笑ひました。そして桃の中から生れた子だからと云つて、桃太郎と名づけました。

(一)

それからお爺さんとお婆さんは大そう桃太郎を可愛がつて育てました。桃太郎は大きくなるにつれて、グングン力が強くなりました。大人でも持てないような大きな石でも、苦もなく差し上げるし、角力ならどんな人にでも負けませんでした。

所が、其の頃、鬼が嶽の鬼共が益々あばれ出して、人々を苦しめて仕様がありませんでした。元來、鬼と云ふものは人を殺して食つたりする恐ろしい奴等ですが、此の鬼が嶽の鬼共は、人を働かせては其のモウケを取つたり、人の働いて貯めた物を貢ぎ物と云つて取りあげたりして、山の奥にドツサリ金銀や米や寶ら物を積み上げてゐるのでした。それで鬼が嶽のまはりの村に住んでゐる大

ぜいの人達は、幾ら働いても働いても、皆な貧乏をして居るのでした。

(三)

『あの鬼共のゐる間は、いつまで立つても俺達の貧乏は救はれない。どうかしてアノ鬼共を退治る法はないものか。』

と、皆がそう云つて居りましたけれども、何ぶん鬼共は力が強いし、鐵の棒を持つてゐるし、隠れ簀だの、打出の小槌だのといふ寶ら物は持つてゐるし、どうにもこつにも仕様がありませんでした。

それで鬼が嶽のまはりの人達は其の鬼共の事を『金持鬼』『金持鬼』と呼びまして、

『金持鬼は人を食ひはしないけれど、人の生血を絞るものだ。人の生血を啜るものだ。』

と云ひました。そして毎日毎日鬼が嶽を見あけては、鬼共を怨んで居りました。

桃太郎はだんく成人して斯ういふ話を聞いて居りましたが、或日お爺さんに、

『どうぞ暫くお暇を下さい。』

と云ひました。お爺さんが『どこへ行くのだ』と聞きますと、

『これから鬼が嶽に鬼退治に行きます。』

と云ひました。お爺さんは頼もしがつて、

『それは勇ましい事だ。お前があの鬼を退治してくれると、村の者が皆な助かります。それなら早く行つてお呉れ。』

と云ひました。すると、お婆さんは又、

『それなら私が兵糧の黍團子を拵へてあげよう。』

と云つて、たくさん黍團子を拵へてやりました。

桃太郎は身仕度をして、腰に刀を差し、黍團子の袋をつけ、そして手に赤い旗を持つて、

ではお爺さんお婆さん、いよいよ金持鬼を征伐して來ます。
と云つて出かけました。

(四)

それから桃太郎は鬼が嶽を目ざして道を急いで行きますと、道ばたからブチ犬が一匹、駈けて來ました。

「桃太郎さん、桃太郎さん、君はどこへ行くのです。」

「僕は金持鬼の征伐に行くのだ。」

「ホウ！ 金持鬼の征伐！ それは愉快だ。」

「ちや君も一緒に行かないか。」

「行かう、行かう。一緒に行かう。僕等も不斷から金持鬼にいちめられて貧乏して居るのだから。」

「ヨシ／＼。では君の仲間を十人ほど連れて來たまへ。兵糧はこゝにドツサリある。」

すると、犬は直ぐに仲間を十人連れて來ました。桃太郎は腰の袋から兵糧の黍團子を出して皆に分けてやりました。犬共は大喜びで、

「愉快！ 愉快！」と云つて、桃太郎と一緒に出かけました。

桃太郎は段々進んで行つて森の中へはいりました。すると猿が一疋、木の枝から降りて來ました。

「桃太郎さん、桃太郎さん、君はどこへ行くのです。」

「僕は金持鬼の征伐に行くのだ。」

「ホウ！ 金持鬼の征伐！ それは愉快だ。」

「ちや君も一緒に行かないか。」

「行かう、行かう。一緒に行かう。僕等も不斷から金持鬼にいちめられて貧乏してゐるのだから。」

「ヨシ／＼。では君の仲間を十人ほど連れて來たまへ。兵糧はこゝにドツサリある。」

すると、猿は直ぐに仲間を十人連れて来ました。桃太郎は腰の袋から兵糧の黍團子を出して皆に分けてやりました。猿共は、大喜びで、

「愉快！ 愉快！」と云つて桃太郎と一緒に出かけました。

桃太郎は又段々進んで行つて山の麓に着きますと、今度は雉が一疋、どこからか「ケン、ケン」と云つて飛んで来ました。

「桃太郎さん、桃太郎さん、君はどこへ行くのです。」

「僕は金持鬼の征伐に行くのだ。」

「ホウ！ 金持鬼の征伐！。それは愉快だ。」

「ちや君も一緒に行かないか。」

「行かう、行かう。一緒に行かう。僕等も不斷から金持鬼にいちめられて貧乏してゐるのだから。」

「ヨシヨシ。では君の仲間を十人ほど連れて来たまへ、兵糧はこゝにドツサリある。」

すると、雉は直ぐに仲間を十人連れて来ました。桃太郎は腰の袋から兵糧の黍團子を出して皆に分けてやりました。雉共は大喜びで、

「愉快！ 愉快！」と云つて桃太郎と一緒に出かけました。

「サアこれで立派に鬼退治の兵隊が出来た。犬の組と、猿の組と、雉の組と、十人づゝ此の三組が仲よくして、お互に助け合つて働きさへすれば、鬼の鐵棒など怖くはない。サアいよく、鬼が嶽に攻め掛らう。」

桃太郎は斯う云つて真先に進んで行きました。犬の組も、猿の組も、雉の組も、皆んな喜び勇んで進んで行きました。

「俺達の組は十人が一つの體のようになつて働かう。」

と、犬の組の真先にゐる奴が云ひました。

「俺達の組も十人が一つの體のようになつて働かう。」

と、猿の組の眞先にゐる奴が云ひました。

『俺達の組も十人が一つの體のようになつて働かう。』

と、雉の組の眞先にゐる奴が云ひました。

『そうだ、そうだ。そして此の三組が又、一つの體の手や足のようになつて働くのだ。』

と、桃太郎が云ひました。

(五)

桃太郎の一隊はいよいよ鬼が嶽に着きました。大きな城が松林の中に見えたり隠れたりしてゐました。そして城の前には大きな鐵の門があつた。まはりには岩の堀で取りまいてありました。桃太郎は大きな聲で、

『此の門をあけい！』

と、云ひながら、ドンドン門を叩きました。門番の鬼共はビックリして、一生懸命その門の中から押さへました。

すると雉の組がバタン／＼と門の中へ飛んで行きました。そして上の方から、

『善く聞け、金持の鬼共。今、俺達は貴様等を征伐に來たのだ。俺達は皆な貴様等の爲に永いあいだ貧乏をしたのだ。今日こそは其の敵打だ。サア命が惜しくば直ぐに降参せい。』

と、大きな聲で叫びました。そして鬼共がアツケに取られてゐる間に、手早くカンヌキを抜いて門をあけました。桃太郎は『ワァーッ！』と言つて眞先に飛びこみました。犬の組も、猿の組も、皆な一度に飛びこみました。

それから皆が門番の鬼共を蹴たふしたり、踏みつぶしたりして、グン／＼奥へはいつて行きますと、中から澤山の鬼共が鐵の棒を振りあげて、飛び出して來ました。すると、雉の組は『ケンケン』と云つて、皆な一緒になつて鬼の目を突ツつき、犬の組は『ワンワン』と云つて、皆な一緒になつ

て鬼の尻や足に食ひつき、猿の組は「キツキ」と云つて皆な一緒になつて鬼の顔を引つかきました。鬼共は「痛い！ 痛い！」『叶はん！ 叶はん！』といつて鐵の棒を投げ出し、あつちにもゴロリこつちにもゴロリと、皆な倒れてしまひました。

そこで鬼の大將は「モウこれまでだ」と大きな鐵の棒を風車のように振りまはしながら、桃太郎を目がけて飛かかつて來ました。桃太郎は「サア來い」と、刀を抜いてそれに向ひました。

鬼の大將は鐵の棒を振り上げて桃太郎を打たうとしましたが、桃太郎がうまくよけるので何うする事も出來ません。そしてどうとう鐵の棒を叩き落されて了ひました。

桃太郎はその際に飛びこんで鬼の大將を組み伏せ、其奴の大きな脊中に馬乗りになつて、

「サアどうだ、金持鬼！。もう悪い事はしないか。すると云ふなら首を取るぞ。」

と云つて刀を首に當てました。金持鬼の大將は縮みあがつて、

「もう決して悪い事はいたしません。どうぞ命だけは、お助けください。」

と云つて、オイオイ泣出しました。

「キツトしないか。」

「キツト致しません。」

「ヨシ、それなら許してやる、其の代り此の城は叩きこわし、金も米も寶ら物も皆んな取り上げる。そして貴様は地獄へでも逃けて行け。」

と、桃太郎は嚴重に申し渡しました。金持鬼の大將は「どうも有りがたう御座います」と、兩手を突いて頭を土にすりつけました。

(六)

それから犬の組と、猿の組と、雉の組とは、またたく中に鬼の城を叩きこわしてしまひ、山のように積みあげた金銀や、米や、寶ら物を皆な取あけてしまひました。

すると鬼の大將は、どこからか隠れ籠と打出の小槌を取出して、

『此の隠れ籠と打出の小槌とは私共の一番大事な寶ら物で御座いましたが、もう悪い事をしないしに、此の通り皆な差しあげます。』

と云つて其の二品を差し出しました。桃太郎は隠れ籠を手に取つて、

『これは何んの役に立つものだ。』

と聞きますと、

『私共が其の籠を着て居りますと、どんな悪い事をしても滅多に人に見つかりません。ですから之ま、私共は思ふまゝに人の生血を絞ることが出来たのです。それで其の事を隠れ籠と申します。』

と、鬼の大將が白状しました。桃太郎は又、打出の小槌を手に取つて、

『これは何んの役に立つものだ。』

と聞きますと、

『其の小槌で人間の頭を打ちますと、金銀が幾らでも自然に湧いて出ます。ですからこれまで私共は、此のように澤山の金銀を貯へて居たのです。それで其の小槌の事を打出の小槌と申します。』

と、鬼の大將が白状しました。

桃太郎はこれを聞いて、

『そうか、そんな悪い事をする道具は俺達に入用がない。』

と云ひますと犬も猿も雉も皆んな聲を合せて、

『そうだ、そうだ。金持鬼には大事な寶ら物か知らないが、俺達には邪魔物だ。そんな物は叩きこわしてしまへ。』

と云つて、皆が寄つて瞬く中に叩きこわしてしまひました。

鬼の大將は、呆れた顔をして居りましたが、いつの間にかコソコソと、地獄かどこかへ逃けてしまひました。

それから桃太郎は犬の組や、猿の組や、雉の組と一緒に、分捕の金銀や、米や、寶ら物を何臺も
 の車に積み込みました。そして犬の組が車を引き出すと、雉の組はそれに綱をつけて先引をする、
 猿の組はうしろから跡押をする、桃太郎は又その跡から赤い旗を振つて掛聲をする。皆が「エンヤ
 ラサ、エンヤラサ」と云つてドンドン村の方に歸つて行きました。

桃太郎の内では、お爺さんとお婆さんが心配しながら、

『もう桃太郎が歸つて來そうなものだ。首尾よく鬼退治が出來たか知らん。』

と云つて待つて居ました。そこへ桃太郎が大勢の犬や猿や雉と一緒に車を引いて歸つて來たので
 お爺さんもお婆さんも跳りあがつて喜びました。桃太郎はお爺さんとお婆さんに鬼退治の話をして
 澤山のお金や、お米や、寶ら物を見せました。

「お、そうか、そうか。お手柄、お手柄。これで村の人達が皆な助かります。」
 と、お爺さんは桃太郎を譽めました。

「犬さんも、猿さんも、雉さんも、も皆さん御苦勞で御座いました。お蔭で私達もこれから安心して
 暮せます。」

と、お婆さんは皆の者に禮を云ひました。

それからモウ、金持鬼が居ないので、村中に貧乏といふ事が無くなつてしまひました。

パリ・コンミュン

一 二個月間の労働者の天下

今から丁度五十年あまり以前、西暦で云へば一八七一年、日本では明治の新政府が出来たて、諸大名が藩籍を奉還し、武士が祿扶持を買ひあけられて兩刀を腰から放した頃、フランスのバリーでは労働階級が政權を握つて、二個月のあひだ『労働者の天下』が出現した。世界何千年の歴史の上で、労働階級が政權を握つたのは、それが本當の皮切りで、其の次が最近の『勞農ロシヤ』である。『パリ・コンミュン』の話は、即ち其の二個月間の『労働者の天下』を物語るのである。ロシヤ革

命は即ちパリ・コンミュンの跡繼であり、パリ・コンミュンは即ちロシヤ革命の先驅である。其の意味に於いて、五十年前の昔語りが特別な興味を引くのである。

二 普佛戦争、パリ政府の降伏

フランスのバリーと云へば、一面には只だ華美の都、風流の都、歡樂の都と見られてゐるが、一面には又實に永いあひだ、世界革命の中心地點であつた。先づ最初が一七九三年（今から百二十餘年前）のフランス大革命。これは丁度、日本の明治維新と同一の意義を有するもので、フランスの封建制度（即ちフランス王國）が其の爲に崩れてしまひ、其あとに金持の天下、資本家の天下（即ちフランス共和國）が出現したわけだが、其あひだには色々なイキサツ、六かしい言葉で云へば迂餘曲折といふ奴があつて、ナポレオン一世の帝國が出来たり、それが又引つくりかへつて第二の共和國が出来たりしたが、一八七〇年（即ち今から五十餘年前）の頃には、更にナポレオン三世の帝國

が出来て、盛んに領土擴張の野心を起し、たうとうプロシヤと大戦争をおツはじめた。普佛戦争といふのが即ちそれだ。

當時、プロシヤはドイツ聯邦の盟主として、王様キルヘルム、大宰相ビスマルク、参謀總長モルトケなどいふエラ物揃ひで、さしも英雄氣取りのナポレオン三世が散々に打ち負かされた。九月一日、セダンの戦ひでは、八萬四千の兵士、五十人の將官、五千人の將校が、皆な一度に降参した。そして皇帝陛下御自身まで、おん痛はしや（といふ言葉が餘り此人にはハマらないが）捕虜の身とならせ給ふた。

するとバリーでは大騒ぎで、皇后ユーゼニーがイギリスに出奔し、帝政が忽ち仆れて第三共和國が出現した。それから間もなく、バリーはプロシヤ軍に包圍され、内務大臣ガンベッタが風船に乗つてバリーを抜けだし、地方を駆けまはつて新軍隊を編成したが、それも同じく敗北つゞきで、結局、十月の廿七日、メッツの大戦争で、十七萬三千人の兵士が、三人の大將と、三千人の將校とに

率ゐられたまゝ、おめく敵に降参した。斯くてフランスの軍隊は大部分、亡びてしまつた。

それから、プロシヤ軍は引續いてバリーの包圍攻撃をやつてゐるが、翌一八七一年一月十八日、王様キルヘルムは遂にバリーの郊外なるヴェルサイユの王宮に於いて、ドイツ皇帝の位についた。其エライ威勢の前に、バリー政府はたうとう二月廿八日を以てドイツ帝國に降参し、アルサス、ローレンの二州を割き、五百億フランの償金を拂ふといふ、手厳しい條件をビスマルクから押しつけられ、それでヤット講和條約が成立した。

三 國民兵の大活躍

所が、バリーの内部に於ける混雜な容易な事ではなかつた。最初、セダンの敗報が達して帝政が仆れた時、バリーの市民は此の危急の場合、差當り前議會のバリー選出議員に『國防政府』を作らせ、首相ツロシユ、外相フアーブル、内相ガンベッタといふ役割でやらせたが、メッツの大敗以

後、政府は最早やバリーを防衛する氣力を失つたのに、市民（殊に勞働階級と、中の下階級の大部分）は、猶ほ依然として、飽くまで戦闘を繼續するといふ、素晴らしい意氣込を保つてゐた。

其の時、バリー市民の實力は『國民兵』にあつた。國民兵といふのは、正規兵が悉く國境の戦線に出かけたあとで、苟くも武器を取り得る總てのバリー人を召集して編成した臨時の義勇兵で、其の大部分は勞働者であつた。然るに此の勞働者の國民兵と、ブルジョア政府との間に反目が生じて、それが遂に勞働階級に勝利を得させる機會となつた。

十月卅一日、メツツの大敗に興奮したバリー市民は、自然に大群集を爲して『オテル・ド・ヴィール』を襲撃した。此の『オテル・ド・ヴィール』といふのは、元來バリーの市役所の事だが、實際はそれが中央政府である。即ち市民が政府を襲撃したのである。然らば市民の要求する所は何かと云ふに、プロシヤの侵入軍に對してバリーを防衛する爲めには、此の非常の際、特別の政府を樹立する必要があると云ふのであつた。従つて或者は公安委員會を要求し、或者は革命コンミュンを要求

した。公安委員會と云ふのも、革命コンミュンと云ふのも、昔のフランス大革命の時に非常な威力を揮つた臨時政府で、つまり革命黨の特別委員會であつた。元來コンミュンとは獨立した市町村自治體の事だが、大革命の當時、革命黨がバリーの市役所（即ちコンミュン）を乗取り、遂に其まゝフランス全國の政權を握つたので、それを革命コンミュンと云つたのであつた。そして今、プロシヤ軍の侵入を眼前に控へたバリーの市民は、その昔の革命コンミュンを思ひ出したのであつた。

そこで市民の大群集がオテル・ド・ヴィールを襲撃したが前記の國民兵は少しも政府を擁護しなかつた。そして政府員は直ちに監禁され、フルーラン、ブランキイといふ、有名な二大首領が、半日ばかり權力を握つた。然し準備のない政權把握者がオテル・ド・ヴィールの内部で議論や憤慨に時間を費してゐる間に、保守派の連中は國民兵の一部を口説き落し、ブランキイだの、フルーランだのといふ、あんな亂暴者に政權を任せては大變だと、臆病な中流階級を威かし、巧に政府員の監禁を解いた。斯くて政府は復活した。そして約束に背いてブランキイ、フルーランを捕縛した。

それからパリイは敵軍の包圍の中に新年を迎へたが、一月廿日、政府はモウどうしてもパリイの籠城が出来ない。従つて敵軍と講和談判を開くより外はないといふ布告をした。すると廿二日の早朝には、國民兵が監獄を破壊してフルーランを救ひ出した。労働階級は再び一揆を起してゐた。所が其日の晝過には、國民兵の中の中流階級の分子がオテル・ド・ヴィールを擁護し、労働派との間に砲戦を起し、準備の不足な労働派は死傷と捕虜とを出して潰えてしまつた。こんな風に労働派の革命的一揆が二度まで流産に終つた後、パリイはいよく敵軍に降伏し、廿九日には郊外の要塞にプロシヤの國旗が翻つてゐた。

そこでパリイ政府は講和條約批准の爲に新に國民議會をボルドウに召集したが、其の選舉には巧妙な術策が行はれて、パリイ以外の各地方では、保守派が大多数を占めてゐた。そしてチエールといふ頑冥で老猾な政治家が行政長官に選ばれた。それから新政府は、今ではもうドイツ軍よりも國民兵が恐ろしいので、一日も早くそれを解散させる事に苦心してゐたが、さすがに輕々しくは手が

つけられなかつた。そこで二月の初から三月の十八日まで、一方は武装したパリイの市民、一方は國民議會と政府、其の二つの勢力が睨み合ひの姿であつた。

四 三月十八日の一揆

ボルドウ（日本なら大阪とでも云つたやうな處）に開かれた國民議會は、講和條約を批准してから、今度はパリイを壓伏して保守派の天下を現出させようとたくらんだ。即ち彼等はパリイを首府とする事をやめ、議會も政府もヴェルサイユに移すといふ決議をした。ヴェルサイユは昔の王宮の所在地で、パリイから五里ばかり西南の小都會である。丁度その事のパリイに知れた日、即ち三月十一日、赤色共和黨（即ち平民的急進派）の機關新聞が禁止され、同時に又、フルーランとブランキイに對する死刑の宣告があつたので、パリイ市民の憤慨は極度に達した。殊に國民兵の給料支拂をやめ、續いて其の武装を解くといふ噂が傳はつたので、國民兵がいよく激昂した。

それから國民兵は急に評議を凝らし、各區から三人づゝの代表者を選出して『國民兵中央委員會』を設置した。此の委員會について非常に面白い一つの特色があつた。即ち委員は總て其の人物の確かな事と、實際上の能力とに依つて、各區の同志から選出されたので、全く無名の人達であつた。それから中央委員會の外に局部的委員會もあつて、其の中で最も有名なモルマントル支部などは、ときとして中央委員會と間違へられた程であつた。そんな風で國民兵の委員會が次第に権力を作り、當時西部歐洲全體に有力であつた『國際労働者同盟』(即ち有名な第一インタナショナル)や、其外諸種の労働團體に後援されて、國民議會と政府とに對する爆發の時機を待つてゐた。

チヨットこゝでバリーの内部に於ける急進派の差別をしておく必要がある。第一は、バリーをどこまでもフランス全國の首脳にしたいといふ都市的愛國者。第二は、王政復活の陰謀が見えてゐるので、それに對抗して共和制を維持しようといふ共和主義者。第三は、主として『インタナショナル』に屬する社會主義者。それで中流階級の人々は、云ふまでもなく大體上、右の第一、第二に屬

してゐたのだが、革命が進行するに従つて、社會主義的色彩が段々濃厚になり、二三週間の後には、それが全く運動全體を併呑してしまつてゐた。其の事は追々あとで分る。

扱、チエール其他の諸大臣は三月十五日、ボルドウからバリーに戻つて來て、早速バリー市民の武装解除に着手した。これは随分市民を見くびつた話で、當時、政府は精々二萬五千人ばかりの、而もダクケきつた正規兵を持つてゐたのに、國民兵は約十萬人を算してゐるのであつた。尤も、國民兵の中で幾隊かは政府側につく見込もあつたらうが、それは殆んど物の數でなかつた。然るにチエールは大膽にも斯る無謀な事を決行した。

それでチエールは先づ、モンマルトルに在る二百五十門の大砲を取り上げろといふ秘密命令を下した。そして十八日の朝の三時頃、市民のまだ寢てゐる中に、正規兵の一隊ばかりが不意を襲ふて、わけもなく其の大砲を占領した。然し彼等はそれを他に運搬する準備を忘れてゐた。それでドサクサやつてゐる中に、モンマルトルの人々が目を覺ましてビックリした。一番先に飛びだして大砲の

まはりに集まり、それを占領してゐる兵卒等に怒鳴りつけたのは、近處の婦人連だつたと云ふ事だ。程なく合圖の喇叭が響き、太鼓が鳴り、國民兵が續々と集まりだした。彼等は鐵砲の臺尻を上に向けて、女や子供の群集と一緒になつて、ヒシヒシと詰め寄せた。正規兵の中にも存外國民兵と馴れあふ氣色が見えた。正規兵の大將ルコントが眞赤になつて三度まで發砲を命じたが、兵卒等は應じなかつた。初め二三發、射つには射つたが、大した怪我人も出なかつた。見る／＼中に群集は前進してスツカリ兵卒等と馴れあつてしまひ、大將ルコントはフンじばられた。

これと同じやうな事が外の諸隊にも起つた。到る處、正規兵が市民と馴れあつた。十一時頃には總ての大砲が國民兵の手に取り返された。國民兵と正規兵とがゴツチャになつて市中を行進した。政府はどうする事も出来なかつた。政府の下に集まつた者は、僅々數百人に過ぎなかつた。

チエールは、バリーの全市が自分に反抗してゐる此の形勢を見て、慌てまくつてオテル・ド・ヴィールの裏口から抜けだして、ヴェルサイユに逃走した。外の大臣連も段々に其の跡を追ふた。總督ヴ

イノイも夜になつてから、兵隊と彈藥とを引き纏めて落ち延びた。

午後の四時頃、クレマン・トマといふ將官が一人、群集につかまつた。これは一八四八年の騒動の時、盛んに虐殺をやつた男なので、直ぐに町家の壁に押しつけられて、廿挺のシヤスポ銃で滅茶々に射ちぬかれた。それから前記の大將ルコントは國民兵の本部の一室に拘禁されてゐたが、そこに群集が怒鳴りこんで來ると、地べたに這ひつくばつてオイオイ泣きだし、家族の者がどうのかうのと云つて憐みを乞うた。自分が今朝發砲を命じた時、其の砲先に死ぬる筈であつた群集の家族の事を彼が少しでも考へたであらうか。兎にかく彼は引きずりだされて、群集の處刑を受けた。勿論、ブルジョアの新聞紙は盛んに此の二人の處刑を批難した。

一體、此日の一揆は全く自然に爆發したので、何等の準備も計畫も組織もなかつた。國民兵中央委員は餘ほど遅くなつてからヤツと開かれた。それから初めて政府の役所や軍事上の要所を占領する事にかゝつたが、其の時にはモウ政府の諸大臣も兵隊もすつかりヴェルサイユに引揚げてゐた。

それがバリ・コンミュン一揆の第一の失策だつた。若しか全體の運動が今少し組織だつて、規律と訓練とが行届いてゐたならば、早くから諸方面の大木戸を閉鎖して、目ぼしい敵を皆んな一纏めにからめる事が出来た筈だ。これにつけても、組織のない一揆の爆發では、折角の仕事を肝腎の所で減茶にするといふ事が分る。

五 バリ・コンミュンの成立

三月十九日には、オテル・ド・ヴィールにも、其他の公けの建物にも、皆な赤旗が翻つてゐた。革命は正に勝利を得てゐた。バリーの政權は既に國民兵中央委員の手中に握られてゐた。中央委員は此の突然の權力把握に依つて寧ろ自ら驚き呆れてゐた。直ちに進んで敵をヴェルサイユに攻めるといふ大事の方策を主張する者も無いではなかつたが、多數の委員は只まご／＼して何事も手につかず、空虚な法律論に拘泥して、早く正式のコンミュン選舉を行ひ、自分等の權力をそれに譲り

渡す事ばかり考へてゐた。如何にもワタクシのない公明正大な心掛には相違ないが、此の危急の場合を切り抜けるに必要な、大膽と機敏と果斷とを缺いた態度であつた。

それでバリー市選出の代議士と、各区の區長とに對して交渉が始まつたが、クレマンソウ、ルイ・ブランなど、いふ其の連中は固よりブルジョアの代表者で、國民兵の中央委員に對して、君等は一揆暴動の團體ぢやないか、など、罵つたりして、オテル・ド・ヴィールを自分等の手に占領しようと思つた。彼等は勿論、内々でヴェルサイユと通じてゐた。そこで中央委員は彼等との交渉を打ち切り、次の水曜日（即ち廿二日）を以てコンミュンの選舉を行ふ旨を宣布した。

然し區長連、代議士連は此の選舉に對して抗議を試み、ブルジョア新聞などがそれに加擔して騒ぎ立て、『中央委員を倒せ！』など、叫ぶ藁人形の示威行列もあつたりして、たうとう選舉は日曜日（即ち廿六日）まで延ばされた、さすが其の時には、國民議會のバリーに對する態度が餘り露骨なので、穏和な區長連もバリー擁護の爲に、國民兵側に對する反抗の鋒先を緩めて來た。

いよく、日曜日に選挙が行はれて、廿八萬七千人の選挙者があつた。パリ・コンミュンが正式に成立した。その議員の数がチョット分らないが、多分百人以上もあつたらう。此コンミュンなる者は市會のやうでもあり、國會のやうでもあるが、前にもチョット説明して置いた通り、決して單なる立法機關ではなく、立法と行政との全權を兼ね有する、純粹獨立な民政機關であつた。然らばロシヤのソヴィエットのやうな者かと云ふに、元來がブルジョア制度傳來の自治機關であつて、ソヴィエットほど明白な労働階級の權力機關ではなく、まだ餘ほど漠然とした所があつた。元來フランスには、市町村の獨立自治體（どんな小ひさなものでも）が主權となり、それを聯合して國家を作らうといふ中世のブルジョアから傳はつた、中央集權排斥の流行思想があつて、それが又、ブルードンバンニク等の無政府主義學說の根本となつてゐた。従つてパリ・コンミュンにも其の傾向が顯著であり、其の色彩が濃厚であつた。然し一方から見ると、パリ・コンミュンの眞意義は只だ労働者の天下であり、労働者の共和國であつて、昔の大革命が王權を倒したのに對し、今度は金權を仆すの

が根本目的であつた。其の意味からすれば、コンミュンは即ちソヴィエットの前身であつた。兎にかくコンミュンは、ブルジョアの政府や議會と全く違つた、プロレタリア獨得の新らしい政府機關であつた。此の先例があつたからこそ、後にロシヤのソヴィエット組織は發達したと見る事が出来る。それは兎もあれ、三月二十七日はコンミュンの宣布でパリーの全市が狂喜のとよめきを舉げた。祝砲が鳴り渡る。マルセーズの奏樂がある。赤旗が到る處に翻へる。國民兵はオテル・ド・ヴィールの前に整列する。人民は其の前に群集して歡呼の叫びを擧げる。新議員等は代る／＼オテル・ド・ヴィールのバルコニーに現はれて挨拶をする。子供や女や若い男は皆はしやぎ、年寄は只だ嬉し泣きに泣くのもある。實に『偉大な日』『莊嚴な日』であつた。

所で、選出されたコンミュンの大部分は、勿論、革命主義者と社會主義者であつたが、中にはブルジョアの自由主義者や急進主義者もあつた。議長に選ばれたベズレイは温厚の長者で、ブルジョアではあるが最後までコンミュンの爲に働いた。執行委員はルフランセイ、チュヴァール、フェリス。

ビヤ、ベルゲレー、トリドン、ユード、ヴァイヤンの七人。其他、軍事、財政、司法、保安(警察)勞働、糧食、外交、救濟、教育等の各委員會が作られた。

然し大體から見て、コンミュンの委員等は革命の政策について甚だ迂濶であつた。第一、革命コンミュンが新たに成立した以上、直ちに明晰な平易な宣言を發表して今後着々實行しようといふ、諸種の新施設を具體的に説明して、一般人心に訴ふべき筈であるのに、彼等はそれを爲し得なかつた。ズツト後れて發表した宣言にも、例の潔癖な中央集權排斥論や、空虚なセンチメンタルな抽象論ばかりであつた。次に彼等は地方との連絡を取る事を怠つた。三月十八日以後、パリと自然に相應する頗る有望な運動が諸地方に起つた。即ちリヨン、マルセイユ、サン・エチアンヌ、ナルボンヌ、ツルーズ其他の都市に、續々としてコンミュンが発生した。けれども中央のパリから何等の援助もなく、獎勵もなく、通信すらもないので、物質上にも精神上にも皆な孤立の状態に陥り、其の多數は僅か數日の中に没落し、マルセイユとナルボンヌとだけが稍や長く持續したけれども、そ

れでも二週間たゝない中に、地方に於けるコンミュン運動は全滅してしまつた。(若し之が統一のある、集中的の組織で、パリと各地方とが密接に連絡してゐたなら、餘ほど面白い形勢を生じてゐたに相違ない。)

之に反し、ヴェルサイユでは、國民議會もボルドウから移轉して來る、ドイツ軍に頼んで捕虜を釋放して貰つた爲に兵力も増大するといふ有様で、氣勢が大いに揚り、地方のコンミュン運動はビシビシ叩きつぶす、パリへの貨物列車は遮斷する、パリ行の一切の郵便物は差し止める、其ほか種々な宣傳はやる、パリに壓伏の準備は手ぬかりなく遂行してゐた。

斯くて三月の末頃には、穩和派のコンミュン議員は(ベズレー老人の外)大抵辭職し、パリの上流人士は續々相率ゐてヴェルサイユに引移つた。

六 第一戦の大敗北

四月一日、チエールは正式に宣戦を布告し、ヴェルサイユ軍は何等の豫告もなしにパリに向つて砲火を開いた。パリ人は周章狼狽した。まさかこんな事にならうとは、今の今まで思つてゐなかつたのである。

然しコンミュンの軍事委員は兎にかく進撃の決議をした。二日の夜、深更、第一隊（即ち右軍）一萬五千人は二手に分れ、ベルゲレーとフルランとがそれを率ゐ、モン・ヴァレリーの壘を包んで北方から進行し、其の壘の背後に於いて二手が更に一隊となつてヴェルサイユに向ふ。第二隊（即ち中軍）一萬人はユードが率ゐて眞直にヴェルサイユに突進する。第三隊（即ち左翼）三千人はチエールが率ゐて南方から進み、ヴェルサイユの直ぐ手前で中央本隊に合する、といふ作戦であつた。若し此の作戦どほり實行されたなら、ヴェルサイユは多分不意を撃たれてコンミュンの手に歸したやらうと云はれてゐる。

所が、コンミュンの國民兵も丸で規律がなく、三隊共に夜が明けてからヤツトのことで、パリーの

城壁を後にしたといふ始末であつた。そして先づベルゲレーの北隊がモン・ヴァレリーの北方に達すると、忽ち壘の中から砲弾を浴せられた。元來のこの壘はパリとヴェルサイユとの間に於ける第一の要害で、最初國民兵が逸早くこれを占領しないのが、軍事上、最大の失策だと云はれてゐる。況んや其の後、ヴェルサイユ軍に占領されてゐる今日、三月十八日の例に倣つて、正規兵が發砲しない約束をしたと云ふのを恃みにして、高を括つてやつて來たのが又大失策であつた。それにベルゲレーが勇敢な戦士ではあるにしても、一軍を統率するだけの知識と、經驗とを缺いてゐたので、砲彈雨下の中にシヤニムニ突貫の命令を發して、瞬く中に自分の隊の半分を殺してしまつた。此の急報に接して早速道を轉じて應援にやつて來たフルランの一手が、同じく眞正面から壘の砲弾を浴せられ、二手が一つに合した時、一萬五千人の一隊が僅かに三千人になつてゐた。そこを又ヴェルサイユからも砲撃されて、散々の體で退却した。フルランは敵兵に捕へられて、虐殺された。フルランは中産階級の出身であつたが、深く勞働階級に信頼された有名な革命家で、此の人

の戦死は頗るバリー人の意氣を沮喪させた。

右軍の此の敗北に次いで、ユードの中軍は退却し、デュヴァールの左翼は降伏した。デュヴァール其他多数の將校は射殺された。悲しいかな、此の第一戦に於てコンミュンの運命は既に決してゐたのである。そしてヴェルサイユの軍隊内では、少しでもバリーに同情を寄せるやうな言葉を發した將校は、片つばしから秘密の中に殺されてしまつた。

七 多数派と少数派

それから以後、コンミュンは只だ敵の來襲を防禦するばかりであつた。ポーランド人ドムブロウスキイ兄弟が、モン・ヴァレリインの砲火を浴びつゝ、メイロウの壘を死守した勇敢壯烈な物語などは残つてゐるが、コンミュン全體としては殆んど何等の積極的施設もなかつた。

四月十六日にコンミュンの補缺選挙があつたが、選挙人は非常に少なく、コンミュン委員の無能

と失態とが漸く人心を失つた事を示してゐた。そこでコンミュンは人心を新にする必要を感じて、此の選挙の後、漸く政綱を發表したが、その起草者は主として新聞記者ピエル・デニスで、其の内容は前に云つた通り、徒らにコンミュンの獨立自治を力説したものであつた。其の説を喩へて云ふと、フランス國といふ大海の中にバリーといふ大きな離れ島を一つ作りあければ、他にも續々として無數の小島が自然に現はれ、それらが自由に聯合して大海の全面に群島の組織を出現させると云ふのだが、強敵を眼前に控へながら、そんな魔術のやうな美しい夢を見てゐるのは、餘りに迂闊な非實際的な考へだつた。過大な中央集權の行はれてゐる官僚國家は誰しも御免を蒙りたいに相違ない。従つて各地方の獨立自治は結構に相違ないが、敵に包圍されたバリーの運命が目前に迫つてゐる此の危急の場合に於いて、潔癖な分權論に拘泥して、革命擁護の實力を確立する必至の方策を忘れたのは、バリ・コンミュンとして誠に悲しむべき不徹底であつた。

猶ほ其の時、コンミュン會議の内部に多数派と少数派が對立して、それに個人的の嫉視反目がか

らまつて、大事を前に控へながら下らぬ論争と軋轢とに時間と精力を徒消したのは、どこの歴史にも有りがちな事とは云へ、如何にも情けない現象だつた。多数派と云ふのは重にブランキスト及び浪漫的共和主義者であり、少数派と云ふのは重に『インタナショナル』に属する社会主義者であつた。ブランキストは即ち豪傑社会主義者ブランキイの一派で『労働獨裁』の古い主張者たとも云はれてゐるが、其の『労働獨裁』は『労働階級の獨裁』といふ意義ではなく、寧ろ『少数豪傑の獨裁』であり、もひとつ手つ取り早く云へば『ブランキイの獨裁』であつたらしい。従つて彼れの幕下に集る者は、主義とか理解とか信念とか云ふ事よりも、只だ首領の命令に従つて動く豪傑の一群に過ぎなかつた。そこで一朝ブランキイが（前記の通り）敵の捕虜になつて見ると、首領なしには殆んど何等の纏まつた運動の出来ない連中はばかりであつた。それで彼等は一生懸命、首領取戻しの運動をやり、こちらの人質を皆んな返してもいゝからブランキイと交換しよう、ヴェルサイユに申し込んだが、チエールは斷乎としてそれを刎ねつけた。

167

こんな譯でブランキストがふらくしてゐる間に、其他の大勢のコンミュン委員等は、浪漫的な空想的な舊式の共和主義を奉じてゐる、古い首領達にクツついて、取りとめもないカラ氣焰を擧げてゐた。フェリス・ピヤといふ人物などは、空言家の首領の標本であつた。一體コンミュン委員は何等の組織も準備も計畫もない運動の中から、あのドサクサの間に選出されたのであるから、随分好い加減な、雜駁な分子を集めた事になつて、外國人もゐる、スパイも交つてゐる、ゴロツキも紛れこんでゐる、といふ有様で、まじめな労働者と云つても、必ずしも一番有方なシツカリした人物が精選されたわけではなかつた。それで彼等の多くは只だ無暗に昔しの大革命の記憶にあこがれ、ワイワイ騒ぐ事の熱情に驅られ過ぎて、冷静に、沈着に、革命擁護の實力を堅める事は、兎かく忘れがちの有様であつた。

『インタナショナル』の人々は、社会主義の空想家と云はれながら、右の人達に比べると餘ほど實際的であつたが、其の理想とする所は、資本家の産業を労働者の自治團體に引渡すと云ふので、政

治上には矢張り分権自治制の國家を主張してゐた。従つてこれも矢張り、軍事上の急要など眼中に入れる餘裕がなかつた。デレクリューズ、ヴァルラン、フェレなどいふ人々は頗る識見の高い、才幹の多い人物だつたと云ふ事だが、少數有能の人物があつても、多數の大勢を動かすには足りなかつた。

其間にヴェルサイユでは益々ドイツ戻りの兵隊が増加して、四月の末には十三萬と云ふ多數に達してゐた。そしてビスマルク其他ドイツの軍事官憲は猶バリーの北方に駐屯してゐながら、チエールとフランスの紳士閥とに有らゆる援助を與へて、其の共同の敵たるバリーの勞働階級を壓伏することに努めてゐた。

八 内政の各方面

一般政策に於いてコンミュンが齒がゆいほど拙劣であつた事は右に云ふ通りだが、内政上の施設

については随分愉快な事もあつた。尤も其の間にも矢張り大失策もあつた。そこで今度は、各方面の施設について少し話して見る。

コンミュンが初めて政權を握つた時、彼等は第一に、一八七〇年十月から一八七一年七月までの家賃、地代等、總ての賃貸料を免除する法令を發布した。それで先づ多數の貧民勞働者が大變に助かつた。さすがに勞働者政府の遺口である。それから各種の委員（即ち諸役所の長官）が出来て、それらの施設に着手したが、こゝに一つ特筆すべき事がある。それらの委員（即ち長官）は總て勞働者、小商人、及び小事務員の出身であつて、其の給料には最高制限があり、最高でも普通の勞働者の賃金と似たものであつた。此の給料を極める時は、初は可なり高い額にしようといふ説もあつたが、ナアーニ、俺達は昨日まで生活してゐた通りに生活すればいゝぢやないかといふ説が多數で、結局、皆が勞働者並の給料でやる事になつた。之が從來の官僚制度を破壊する道であつて、プロレタリア・デモクラシーがブルジョア・デモクラシーと異なる所以である。現にロシヤでも此の遺口

である。

財政部はバリ・コンミュンの仕事の中で最もよく整理してゐたと云はれてゐる。委員はジュールド、ヴァルランの二人で、ジュールドは元どこかの會計係をしてゐた人、ヴァルランは製本職工であつた。此の二人が、諸種の公共事業費から國民兵の給料まで合せて、一日六十七萬五千フランといふ多額な支出をする爲に、總てに切りつめた節儉を行ひ、嚴密な記帳をしたのは、實に模範的の遣口だつたと云はれてゐる。

但し、フランス銀行に對する處置は一般に大失策と認められてゐる。尤も、それは右二人の失策ではなく、バリ・コンミン全體の責任である。初め二人はフランス銀行に談判して百萬フランの金を引き出したが、それは程なく使ひ盡したので、再び談判に出かけると、今度はニベもなく拒絶されてしまつた。當時フランス銀行には、約三十億フランの正金と紙幣とがあつた。今から五十年前の三十億フランは實に大した金で、それだけの金があれば、ヴェルサイユの政府員を皆な買収す

る事も出来るし、コンミュンの運動者を雨の如く全國各地に注ぎかける事も出来た筈である。然るにコンミンは此フランス銀行に手をつける事を躊躇し、彼等の拒絶に會つて指をくわへてスゴスゴと引きさがつた。それは主として前記のベズレイ老人が、ブルードン流の信用説を楯にして、コンミン員全體の全體を威かしたからであつた。ベズレイは善良で正直な人物には相違なかつたが、ブルジョアの出身であるだけに、財政上の事になると矢張ブルジョアの偏見を持つてゐた。そこにコンミン員全體の思想も矢張り不徹底な所があつて、一面には正義人道の考へから財産の没收を憚り、一面には所有權神聖のブルジョア思想に捕へられてゐたのであつた。そこは、ロシヤのボリシエキキが直ちに中央銀行を差押へたのと違つてゐる。

次に郵便電信の事務。これはチエールの政府員が態と減茶々々にしておいて、切手類までスツカリ奪ひ取つて引揚けたのだが、テーズといふ銀細工の職人が委員となつて其の局に當り、從來の高級な役人は皆な追ひのけてしまひ、其のあとに勞働者を入れて事務を取らせ、賃金を上げ、時間を

短くし、そして暫くの間は一切の郵便事務を確立した。尤も電信の方は、チエール等に電線を切られてしまつたので、どうする事も出来なかつたが、郵便の方では秘密配達夫に戦線を横ぎらせて、バリーの郵便物を近隣町村のポストに投入するといふ機敏な親切な遣方まで爲し遂けてゐた。造幣局にはカメラナといふ青銅職工が委員になつたが、技術上に著るしい改善を加へたので、コンミュンの没落後、ヴェルサイユの政府が自分の造幣局長に其の改善の方法を教へてくれと、彼に頼んだ程であつた。

救済局にはトレラールといふ古い革命家が委員になつたが、そこには忽ちにして慈善といふ舊式の精神が亡びて、公けの救済を受ける事は人民の権利だといふ思想が生じた。従来、貧乏人を馬鹿にしたり、虐待したりした、醫員や看護婦に對しては、トレラールは特に厳格な態度を取つた。惜しいかな、トレラールの改革を完成するには、コンミュンの壽命が餘りに短かつた。

糧食委員は四月の末まで、バリー人民に食物を供給するのに別段困難を感じなかつた。チエール

ルが貨物列車をとめてからでも、ドイツ軍の占領地とヴェルサイユとの間の中立地帯を通じて、糧食の輸送が続いてゐた。それにバリー市自身でも、まだくゞ永く籠城が出来ただけの糧食の貯蔵を持つてゐた。それで委員は只だ價格を下落させる事ばかり努めてゐた。

司法部にはプロボウが委員であつたが、人民を捕縛する事などについては、餘り神経質すぎると思はれるほど、人民の権利を尊重した。殊に所有權に對する用心は馬鹿々々しい程だつた。例へば武器を密藏した瓦斯會社の家宅搜索をやつた時、そこで押収した金箱を態々返附したといふやうな事實がある。

教育部の委員は後に有名な社會黨議員になつた、ヴァイヤンであつた。同じく有名な學者兼無政府主義者エリゼ・ルクリュなど其の部内の博物館に働いてゐた。教育部の主な改革事業は宗教教育の禁止であつたが、或區に於いて小學生徒に衣服と食物とを無料で供給する事をやつたのは、最も著るしい進歩であつた。

外交部の委員グルーセは絶えず金の不足に苦しんでゐたが、若し銀行にうなつてゐたアノ金をグルーセに供給したなら、随分有益な宣傳も出来たゞらう。それに今一つ残念な事は、資本家政府の祕密文書を澤山握つてゐた筈なのに、ナゼそれを公表して彼等の罪惡を暴露しなかつたのか。

労働部の委員はオーストリア人フランケルで、此人は『インタナショナル』に屬する労働者であつた。こゝではさすがに社會主義的施設が可なり顯著に實現されてゐた。總ての質物は其の置主に返された。八時間労働は提案したゞけで行はれなかつたが、バン燒の夜業は禁止された。労働賃金に對して資本家が罰金を課したり、支拂差止をしたりする事も禁止された。そして目下使用されてゐない工場は悉く没收されて、労働者の組合に引渡された。此の最後の一事は、兎にかく歴史上に於ける資本家剝奪の第一着手であつた。猶フランケルは戦争の爲に破壊された労働組合を復活させる事に非常な努力を費し、僅かな日數の間に卅四個の有力な大組合を發達させた。

保安部の委員（即ち警視總監とも云ふべき役目）はブランキストの手に握られ、最初は廿五歳の

青年熱情家リジョールが其の任に就き、後にクルルネー、フェレの二人が順次それに代つたが、此のリジョールとフェレとはコンミュンの人物中で、一番コワイ人と稱されてゐた。彼等は舊警視廳の文書を引張りだして、それに依つてコンミュンの中に交つてゐるスパイ共を摘發した。彼等は又ヴェルサイユが無暗に捕虜を虐殺したのを憤つて、今後若し猶ほ捕虜を殺すなら、コンミュンは其の一人に對して三人づゝの人質を殺すと宣言して、バリーにゐる敵方の人物を人質として拘禁した。其の人質の中にはバリーの大僧正ダルボア、副僧正ラガルド、マドレーヌの小教正ヂユゲリ、控訴院長ボンジャン、メキシコ戦争の責任者たる資本家ジェットケルなどがあつた。然し此の宣言は無効であつた。ヴェルサイユでは暫くたつと、又盛んに捕虜の射殺をやりだしたのに、コンミュンの手では四月二日から五月廿三日までの籠城の間、一人の捕虜も、一人の武装せぬ人も、殺されたタメシがなかつた。

軍事部の方では、最初リユリエーといふ飲みぬけの法螺吹が司令官になつて大味噌をつけ、次に

アメリカ戦争で大變な才能を現はしたといふクリューズレーが委員になつたが、これが又サツパリ駄目で、イツシイの壘の撤退が報ぜられた時、其の處罰として捕縛された。其後に於ける軍事部の變化は追々に話して行くが、要するに、パリ・コンミュンは初から終りまで、軍事上にはへまばかりで、結局、悲惨な最期に到着した。

然しコンミュンの支配下に於けるパリ市の一般光景はどんなであつたかと云ふに、如何にも靜かで、平和で、而も犯罪らしいものが殆ど無かつたとは、敵も味方も一様に認めてゐた所である。從來ならば種々の暴行があつたり、淫賣婦が無數に出没したりしてゐた場所に、コンミュン時代にはそんな者の影もなかつたと、或イギリスの旅行者は語つてゐる。そしてヴェルサイユの御用新聞が毎日、パリ人の大殺戮を要求してゐるのに、コンミュンの革命新聞には、一言でも血に渴いたやうな記事がなかつた。其の外、教會の壇上には赤旗が掲げられて、キリストの福音の代りに社會主義の理想が説教され、チュイレリーの王宮は誰でも無料で聞きに行かれる音樂場に變つてゐた。

猶、役人が總て、裁判官でも、警察官でも、悉く人民から選舉され、そして何ん時でも人民から解任され得る者であつて、眞に社會の雇ひ人たる性質を持つてゐた事は、特に言ひそへて置く必要がある。

九 煙硝と火繩・柱塔の引介し

四月三十日、國民兵がイツシイの壘を撤退したのはコンミュンの大打撃で、或る一青年の如きはこゝを明け渡す程なら寧ろ自ら死ぬると云つて、煙硝と火繩とを両手に持ちながら、最後まで其の入口に立止まつて居たほどだつた。

そこで今度は昔の大革命の當時に倣つて「公安委員會」を設置するといふ説が起つて來た。それは舊式革命の狂信者なる多數派の首領フェリス・ビヤの發言で、偶像的な飾り言葉を好むフランス人の氣質を最も善く現はしたものである。尤も、其の時の執行委員は先達て改選されて、クリュー

ズレー、ジユールド、ヴィアール、グルーサー、フランケル、プロトウ、アンドリオン、ヴァイヤン、リジョールの九名になつてゐるが、其の威令は少しも行はれないので、此際シツカリした中央権力が必要だといふ一般の感情が生じてゐるので、それが自然、公安委員會の設置を促がしたわけでもあつた。そこで公安委員設置案は二十三、對、四十五の多數で、多數派の勝利となり、少數派は憤慨して委員の選舉に加はらず、つまりランヴェイエ、アルノウ、メイレー、ゼラルダン、ピヤの五名が、多數派だけの選舉で當選した。

それからクリューズレーに代つて軍事委員に擧げられたのはロツセルといふ若い士官で、俺は社會主義なんといふ事は少しも知らんと威張つて公言したほど無智な男であつたが、軍事上の知識は多少あつたものと見え、暫らく大ぶん調子がよかつた。先づ戦線を三方面に分つて、北軍をドンブロウスキイ、中軍をセシリヤ、南軍をウロブレウスキイの三大將に擔任させた。キイといふ語尾のある二人はいづれもポーランド人で、いづれも立派な大將であつた。セシリヤも可なり働ける軍人

だつた。ロツセルは又、バリーの三要害たるモンマルトル、トロカテロ、バンテオンの三個所を連結するバリケード（築塞）の組織を計畫した。そんな事で一時防禦の見込が少し立ちかけたが、國民兵中央委員が兎かくロツセルの命令に服せず、それを又公安委員のピヤが突ツついたりするので、ロツセルはたうとうヤケを起し、國民兵のデモクラチックな組織を變じてナポレオン式の軍隊にしようといふ案を出したり、五月九日いよくイツシイの壘が落ちた後には、コンミュンに向つてクーデターを試みたりして、つまり失敗して逃げだしてしまつた。

それからコンミュンは又、公安委員の改選をやつた。最初の選舉から、僅かに八日の後だから随分馬鹿々々しい。そして矢張り多數派ばかりで、ランヴェイエ、ギャンボン、デレクリューズ、アルノウ、ユードの五名が當選した。そしてデレクリューズが軍事委員になつた。そこで少數派はいよいよ憤慨して、少數獨裁政治に反對するといふ名義でコンミュン會議から脱退した。然し此の危急の際、獨裁政治に反對するなど、いふ潔癖は話にならないので、二日の後のコンミュン會議には、彼等

の多数はモウ跡戻つてゐた。

こゝに一つ非常に面白い事があつた。バリーにあるチエールの家を打ちこわしたのもチヨット面白かつたが、それよりも五月十六日、ナポレオン一世の勝利を記念するヴァンドームの柱塔に三色旗を掲げて、其の國旗もろとも柱塔を引付したのは、子供らしいと云へば子供らしいに相違ないが、見物の群集の大歡呼を博したのも無理はない。

十 バリケードの戦ひ

五月廿一日の日曜、シャンゼリゼーの大通りや、チユイレリーの公園に、艶々とした木々の若葉が暖かい春の日に輝きわたつてゐた。其の日の午後、チユイレリーの公園で、國民兵の戦死者の寡婦や孤兒の爲にする、野外奏樂の大會が催され、何千といふバリー人が晴れ着を着飾つて集つてゐた。そしてそれが終つた時、國民兵の士官がプラットフォームに立つて、此の次の日曜にも又こゝで同

様の音樂會を催しますと案内した。あゝ其の次の日曜よ。それは眞暗い雨降りで、血の川と死骸の山とがバリー市中出现したのであつた。

丁度、右の案内をやつてゐた三時頃、ヴェルサイユの敵兵は、防備の薄いサンクラウドの木戸を破つて、バリーの市中に侵入しかけてゐた。ドムブロウスキイは直ちに其の旨を公安委員會に報じた。公安員會議は更にそれをコンミュン會議に報じた。コンミュン會議は狼狽の餘り、三々五々の小群に分裂して、雜然紛然、取りとめもない争を續けた末、夜の八時ごろ不得要領の中に散會した。それがコンミュン會議の最後であつた。「銘々自分の持區を守れ」と云ふのが一般の叫びであつた。公安委員は此に至つて殆んど爲す所を知らなかつたが、只だ軍事委員のデレクリューズが獨り沈着の態度を持し、市街戦はバリー人に取つて却つて有望だと教へてゐた。

夜の十一時頃になると、ヴェルサイユ軍はもうバリー市の中央に侵入してゐた。「之からバリケードの戦ひだ。」「銘々自分の持區に歸れ。」「これで、いよくコンミュンの組織も統一も規律も亡びて

しまつた。沈着なデレクリューズすらも、握りこぶしで敵の整然たる軍隊に勝てるような、自殺的の揭示を出した。

廿一日の夜から廿二日の朝にかけて、陰鬱な沈黙の（今はもう既に遅い）準備がはしまつた。往來の敷石を掘り起す鶴嘴の音が物凄く響いてゐた。男も女も子供も皆一緒に働いてゐた。そして廿二日の夕方までには到る處にバリケードが出現した。三要害の中、トロカデロは既に陥り、バンテオンも既に包圍されかけてゐた。残るは只モンマルトルの高地であるが、それを中心に擁護するといふでもなく、組織もなく計畫もない、只だ雑然たる無数のバリケード、何百といふバリケードが到る處に出現した。「銘々自分の持場を守れ。」それより外に叫びは無かつた。分權主義、自治主義、獨立主義、離れ島主義、群島主義の理想が、悲惨に且つ壯烈に、こゝで實現されたわけであつた。

どうせモウ斯うなつた以上、いづれにしても滅亡の運命は免かれなかつたらうが、若し廿二日にモンマルトルと、バンテオンとから、狙ひを定めた砲彈が發射されたなら、隨分敵を苦しめる事が

來たらうと云はれてゐる。然るにモンマルトルは沈黙してゐた。そして夜の十時頃には、チュイレリー宮のうしろの財務局が敵彈の砲火を受けて炎々と燃えあがつた。これが大火の初まりであつた。廿三日の朝早く、ドイツ軍のビスマークは中立地帯を開放して、ヴェルサイユ軍のバリイ侵入を援助した。こんな事實を見ても、階級的利益の前には「愛國心」といふ空虚な者が泡となつて消えてしまふ事が分る。愛國的なフランスのブルジョアは、フランスのプロレタリアを亡ぼす爲に、平生から憎んでゐるプロシヤ兵の助を求め、甘んじて其の泥靴を嘗めたわけである。

然るに一方では、コンミュンの人々は此の共同の危険の前に平生の憎みも怨みも忘れてしまつて、多数派も少数派も、只だ最後の努力を競つてゐた。けれども今となつてモウ何が出來よう。其の日の晝頃には難攻不落のマンマルトルが脆くも敵軍に乗り取られた。そして其の時が即ち『血みどろ週間』の大虐殺の幕あきであつた。四十二人の男、女、子供等が、ロジエー街に引きずりだされてルコントとクレマン・トマとの人身御供として、滅茶々に虐殺された。其の時、敵の兵卒は彼等

に迫つて皆な一様に膝まづかせようとしたが、中に一人の婦人は両手に子供をかゝえたまゝ、どうしても膝まづく事を肯んじないで『此の奴等に、我々の立派な死にざまを見せてやれ』と仲間の人に向つて叫んだ。そんな間に、ツイ二三日前まで大言壯語、悲憤慷慨をやつてゐたコンミュン會議の連中で、コソ／＼と隠れた奴も少なくなかつた。例のフェリス・ピヤも逸早く逃げだしてしまつた。

セイヌ川の南方にはコンミュンの兵力が猶ほ少しばかり残つてゐた。そこでウロブレウスキイは此の左岸に勢力を集中して、更に最後の一戦を試みようといふ計畫を立て、それをデレクリューズに提案したが、武器も弾薬も糧食も既に缺乏した今日、モウどうする事も出来なかつた。公安委員と國民兵の中央委員とは、ヴェルサイユ兵に對して、バリーの同胞に發砲するなといふ張札をしたが、それも今では全く無効であつた。其の日の夜には、敵はもう、バリー市の半分以上を占領してゐた。

十一 赤旗と三色旗

廿三日の夜は、百個所の大火事が至る處の血の池を照してゐた。全市の半分は現實の修羅場と化してゐた。

其の夜、オテル・ド・ヴィールの寢床の上に一つの屍體が横たはつてゐた。其の頭のほとりには寂しげな蠟燭が一ツともされてゐた。人々は皆な其の前にコウベを垂れた。それは最も忠實に善く戦つたドンブロウスキイの遺骸であつた。明方になつて、それがペール・ラ・シエーズの墓地に運ばれる時、途中のバリケードでは、國民兵が皆な肅然として筒を捧げた。

チユイレリーの宮殿は夜どほし焼け續けてゐた。廿四日の朝にはバレイ・ロアヤル其他で最後の激戦があつた。午前九時、オテル・ド・ヴィールに集まつた數人のコンミュン委員が、もう此の本據を撤退するより外はあるまいと相談してゐる中、忽然として其の屋の棟が燃えだした。一時間の後

には、オテル・ド・ヴィールの跡形もなかつた。コンミュンの本據は第十一區の役所に移された。

コンミュンの防備はいよく、全く混亂に歸した。其の間には斯ういふ悲惨な滑稽もあつた、或る士官が火急の使命を帯びてバリケードのそばを通りかゝると、『オイ。オイ。もう肩章など付けた士官ヅラは駄目だよ』早くこゝに來て、土運びでもしろよ』などと皆がそれを引捕へて、バリケードを築く手傳をさせた。

人の好いバリーの勞働者も、今では疑ひぶかくなつて、スパイといふ嫌疑が掛れば、證據があらうがあるまいが、直ぐに引ツつかまへて射殺したりした。然しそれも無理か、敵は男でも女でも子供でも、國民兵の親戚だとか、コワイと云つたとか氣の毒だと云つたとか、ほんの口實さへあれば、片つばしからドシ〜と虐殺した。然し餘り多く女を殺したので、其の言ひわけには少し困つて、女が石油を持つて火をつけて歩いたといふ神話まで捏造した。

そこでコンミュンの生き残つた人々は、最後に三百人の人質の事を思ひ出した。此の人質は、敵が

何千人の男や女や子供を虐殺した今日まで、手さへもつけずに監獄に入れてあつたのだが、保安委員のフェレがたうとう意を決して、此の復讐に依て少しでも敵の虐殺熱を冷まさせようと考へた。然し彼は僅かに其の三百人の中から六人の巨魁を選んだ。即ち大僧正ダルボア、控訴院長ボンジャン、外四名であつた。所が、いよく彼等が射殺される段になると、大僧正殿は餘り天國に行きたい様子も見えず、控訴院長さんは腰を抜してしまひ、如何にも哀な様であつた。そこでフェレは發射を命ずる前に、コンミュンは彼等の死に對して責任がない、責任は總て虐殺を恣いましてした彼等の仲間にある事を、篤と彼等に申し聞かせた。

兎かくする中に大火はいよく蔓延して、セイヌの岸の片側が一面の火の壁になつてしまつた。そして赤旗の見える處は段々に少なくなり、到る處に三色旗が翻つてゐた。二十六日の夕方、病み疲れてゐたデレクリューズは、もう之までと見切りをつけ、第十一區の役所から歩み出して、杖を一本持つたまゝでシャトウ・ドウのバリケードの上に登つて行つた。一分間の後には彼は既に敵